
男のオレが、転生でとある魔術の男の麦野に転生！！

ロンパニール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男のオレが、転生でとある魔術の男の麦野に転生ーー！

【Zコード】

Z5846X

【作者名】

ロンパール

【あらすじ】

ある日、遊んでいた神に間違つて殺された少年は、神に怒鳴りながらとある魔術の世界の麦野に転生する。しかし、麦野は男になつていた。またもや怒鳴りながら、少年は生きていく。赤ん坊から始まり、アイテムを作り、「闇」の世界で生き人を殺し続ける。

そんな生活の中、少年は綺麗な容姿から男からも女からも一眼ぼれされ続け、ついには、レベル5の垣根にも一眼ぼれされる。

垣根が変態化してます！注意！ 感想を誰も送れるようにしました。しかし、私が不快と思う者や、いやがらせ・スパムなどは消

れかでござる。

第1話 心地よさをめぐる想い

オレはその日、いつものようにしていた。

いつもの女工授業をせせり、遊びあぐり、そして帰る途中だった。

そんな時、オレはホッケリ死んだ。

「ひいつ……」「めんなさこ……」

オレがそう怒鳴ると、目の前にクソガキは涙目で謝る。ガキだが、コイツは上位の神らしい。
でつ、なーんかこいつがふざけたことぬかしやがったんだよなあ、なんだつたつけなあ？

「確かに一間違つて殺しちやつたとか言つたんだよなあ・・・・なあ？」

「そ・・・そ・う・で・す・・・す・み・ま・せ・」

「（涙）」

ふざけんなよおーーーー何が間違つて殺しちゃいましただあーーー?

アン！！！？

「遊んでて間違つて運命を捻じ曲げちゃつた」とか言われて仕方ないね」とかですまさると思つてんのかよーー!?

「だから・・違う世界に転生せよ! と・・・どんな世界でも
いけますよ――――――――!

九十九

その言葉でオレは止まる。

「じゃあ「とある魔術と禁書目録」でもか?」

「あつはい、もつちろん！それ

ガキがなんか変なステッキ降り始めた。すると、オレは足元に違和感を感じた。下を見てみると、穴が開いていた。

直ぐにその穴に落をしていく

「ちよつ……まだ誰に転生するとかいつてねえだろおがあ……！」

「大丈夫です、あなたの性格にぴったりした人ですし、性別も変えますから・・・やつと怒られなくてすむ・・・」

「テメー……」「アタシ……今、本番だ！」

お……

怒鳴つてこらしあひにも、オレは落ち続ける。

ガキの姿も見えなくなつちました。

もしまだ会つたら殺そう。そう思つた次の瞬間、オレの意識はなく
なつた。

第2話 10歳です

ん?なんか三の前が一きなり明るくなつた。

頭が痛い・・えと・・オレは何してたんだっけ?

確かに……ケン禪は間違って殺されて、それでとある魔術の世界に

そう思い、オレは瞼を開ける。

すると、視界に入つたのは笑顔の女と男たつた。
うい、一見い、せんは阿波も舞を下る。

駄目だ、消えねえ。てつことは夢じやない……

・・・・・や待て待て待て!!

オレは知らねえぞこいつら！会ったこともねえ！！

佐々木利政著「江戸の歴史」

気持ち悪い！一発殴つて逃げ・・・

手足を動かそうとして違和感を感じた、動きにくく！何これ動きに

オレは自分の手を見る、すると、オレの手は赤ん坊のように小さかつた。

ん? 何でオレの手小さいんだ? もしかしてあの神、腹の中にいたときに転生させたのか? そうなのか? だとしたら・・・
ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・だな

あつこれオレの口癖。

とりあえず、あの神は次あつたら絶対殺す、原型とどめない様に穴あきにしてやる。

そう誓い、オレは眠った。

もつこの状況を突破するには眠るしかないと判断したからだ。

あれから何年たつただろう。

10年だ。つまりオレは10歳だ、小5だ。

いや〜、オレも結構大きくなつたな。

てか、オレは誰に転生したのか分かつた。麦野だ。麦野沈利だ。だけどなあ、おかしいことにオレは男だ。つまり麦野が男になつてたんだよ。

名前もちょーと変わって麦野 沈鳴。^{しづなり}へへ、沈男じゃなくてよかつたぜ・・なんか男だとありきたりすぎるとからな。

今のところ、クソ神は一度も現れていない。くそつ早く出でこよ。

とつまあ、本題に入るか。てか、何話せばいいんだ？

金は大丈夫なのか気になつたが、全然大丈夫だつた。メイドも召使もたくさんいるは、オレ専用の執事もいるわでこりや

あー楽しい！！愉快だなあ！！！

まつ、ここでの暮らしが十分満足だ。

オレは第4位だ。クソ、第4位つて気に食わねえなあ、誰だあ？オレより上のやつは・・・

第3話 仲間探しの旅・・・嘘だぜ

今、オレの目の間にはあのクソ神がいる。

「どうですか？新しい生活は」

「ああ、とつてもいい。とつこつわけでテメーを殺す」

「ええ！？意味がわからない！…殺さないで～～～～！」

チツ、ショウがない。

「イツには世話になつたし、大田に見てやるよ。オレはメルトダウナーを撃とつとした手を下す。

「はあはあ・・・もう殺さない？」

「もう殺さない。たぶんな」

「たつたぶん・・・まあいいか・・・今日で余るのは最後です。まつ、殺しちゃつたお詫びに、あなたの能力の弱点をいろいろなくします」

「ああん？そんぐらい当たり前だらおがよおーーーーーーーー！」

「ひいっ！…」めんなさい！…無くす弱点は反動を無くすとか、腕が吹き飛ぶほどの力をしても大丈夫とかそんなものですが…」

「ふうん……まつ、それならいいか。第一位になつたら後々面倒だしな」

許してやるよ。

仕方ねえ……

「じゃつ、もう用無しだ。帰れ」

「え・・あ・・はい・・分かりました・・・」

この時のオレの表情を言つてやる。清々しい笑顔で歸れつて言つた。

長い年月が過ぎた。オレは高校2年だ。

まつ、ほとんど通わずに家の中についたけどな。

だってなあ？簡単過ぎんだよ。問題が。

ノートとらなくともテストは90点台とれるしね。面白くねー。

とつ、言ひわけで、こんな暇な生活を自分で変えてみよつて思ひ。
まあ、とつあえず家から出ないと云えな。
何じよつかな～・・・

家から出たオレは、外をふらつく。

なぜか女子がキヤー・キヤー黄色い声を上げるが無視する。

うるせえんだよ、キーキー泣くんじゃねえ。めぞわりだなあ・・・いつそ殺してやるうか・・・んつ・・?殺す・・?

いいこと思いついた!!原作の麦野もやつてたことだからオレにもできるな!!

そう思い、オレは路地裏に入り、走り回った。

狙いは「闇」の世界の人間に会つため。

なんか面白そうじゃねえか。人をプチプチ殺すのはよお。ひひひと笑いながらオレは角を曲がる。

すると、だれかにぶつかった。

「いやえなーーちゃんと前みやがれーー」

見てなかつたのはオレだがオレは謝らない。

オレが悪いなんて認めない。オレはいつだつて正しい。

「はうひー・・・・・じゃなくてーーぶつかってきたのはアナタって

訳よーー」

「あんだと！……」

相手が顔を赤らめて変な声を出した気がしたが無視をする。
知らないガキに口答えされたことに頭に血が上る。
オレに向かつてそんな口きいていいのか？その体真つ一つにするぜ。

「……？あなたって、「闇」の人間？……目が濁つてないけど。
・・・

「ああん？今からなるうつと思つてたんだよ。テーマ、「闇」の人間
か？」

「「闇」のこと知ってるんだから、結局私は「闇」の人間つて訳よ！
貴方は「闇」に入りたいの？だつたら私としない？
結局、アイテムつて組織作つたわいいけど、メンバーが私しかいな
いつて訳よ」

「ずいぶん寂しい組織だなオイ。てか、それ組織つていうのか？」

「細かいことは気にしない！……ねつ、いいでしょ！……？」

オレは考える。

確か・・・麦野が居たのは・・・「アイテム」・・・！
・・・なんつー偶然だ。早速仲間が見つかった。これを逃したら次
はねえな。

「分かつた分かつた。ただし、リーダーはオレだ。オレは誰かの下につくなんてことは嫌だぜ」

「ええ！？それはちよつとワガママすぎる訳よーーー！」

「いいのか？オレが入らないとメンバーは増えない。それに・・・」

金髪頭の外国人のガキの耳に口を近づけ、続ける。

「断つたら・・・後悔するぞ・・・」

「／＼／＼！＼！＼！わつ・・・分かつてわけよ・・・」

脅したつもりでいったんだけどな・・・なんで顔が赤くなるんだ？
わかんねえな・・・まつ、いいか。リーダーになつたからな。
オレはガキに手を伸ばす。

「オレの名前は麦野 沈鳴。ようしくな、クソガキ」

「ちよつ！私にはちやんとした名前があるって訳よーーー！」

私の名前はフレンダ＝セイヴェルン。フレンダってよんで。ようし
くね、麦野」

俺たちは握手を交わした。

そして、次の日から仕事が始まり、オレは暗い世界の住人になった。

第4話 初任務は人殺し

あの後、フレンダのアドレスをもらい、オレは明日に備えて寝た。
そして、今起きようとして睡魔と闘つてる。

だってなあ・・・いつも毎近くまで寝てるからな・・・眠い・・・
でも起きないと・・眠い・・・ねむ・・・ＺＺＺＺはつ！！

駄目だ駄目！ 今田は早速の初任務じゃねえか！ しつかりしろ！ オレ
！！

オレは一気にベットからでる。

ゆっくり出たら一生出れない気がしたからだ。

二ートって・・いいな・・・

「遅いって訳よ!…だいたい今日はせっかくの任務なんだよー?なのに・・・」

「うむせえ、オレに指図すんな」

集合場所に着いたらフレンダがギャーギャー言い始めた。
五月蠅いので眉間にしわをよせ、低い声で齧る。オレに説教すると
はいい度胸じやねえか。
殺してやろうか。いや、駄目だな。こいつを殺したらこの後の仲間
集めが大変になる。

「今日の任務はここで取引する人間を一人残らず殺すこと。
結局、最初の任務はこんなものって訳よ」

「へえ・・腕ならしごちゅうどこいな」

殺すだけか。これならメルトダウナー撃てば終わりだな。
正直、施設を気づかれずに破壊するとか細かい任務じやなくてよかつたぜ。

「いとくけど、「表」の人間にばれないようにしないといけない
のよ?」

・・・・チツ！

目的の場所に行き、取引をする「闇」の人間が来るのを隠れて待つ。どうせなら固まっているところを一気にやつたほうが楽だからな。おっと、来た来た・・・

オレは息をひそめて一か所に固まるのを待つ。
すると、運よく、一か所に固まってくれた。ずいぶん馬鹿な奴らだ
な。

命を狙われてるとはじらぎに・・・な?

オレはフレンダを見る。

フレンダはOKとサインをする。

オレはうなづくと、手を「闇」の人間に向け、撃つ準備を始める。
すると、じつちに気付いたやつが銃を構えた。
遅いんだよ、『!!』。

ギュオンッ！

ひいつ！

恐怖に顔を歪め、断末魔をあげながらオレのメルトダウナーに飲み込まれていく。

いつものように物を壊すような感覚じゃない。何か・・・何か・・・命を消すような感覚?みたいな・・・

快感

オレは笑う。

もう完全に「闇」の人間になつた。

人を殺すつけてこんなに楽しいんだな。

おもしれえ・おもしれえなオイ!!

オレは暫くの間笑っていたが、しばらくすると、ぽつかりと心が開いたようになつてしまつた。

なんだろう・空しいな。

オレはもう人間じゃない。
人を殺す「化け物」だ。

フレンダ

凄い・私は麦野の能力を見たとき、素直に思つた。

あんなにいた人間を、たつた一発で跡形も残さずに消し去つた。

結局mレベル5の威力は、私の想像を超えてたつて訳よ。

人を殺した後の麦野は狂ったように笑った。

口が引き裂けそうになるまで開き。

今は快感を感じてるんだろう。

だけど、すぐに空しくなるって訳よ。

私も最初はそうだったから。

だけど、結局、今でも人を殺した後は空しいって訳よ。

もう、私たちはもとには戻れない。

第5話 慣れればいいんだ

「んじゃな、フレンダ」

「ばいばい、じゃつ、明日もよろしくって謝よ」

オレはフレンダに手を振り、家に向かつ。まだ心に空しさが残つてる。

オレは人を殺したんだ。もう「闇」の人間だ。「闇」の……

・・人を・・・殺した・・・

オレはフラフラしながら家のドアを開ける。

家に入ると、家の匂いがして、なんだか落ち着いたが、心にあつた空しさが喉にこみ上ってきた。

急いでトイレに向かい、胃の中のものと一緒に空しさもすべて吐き出す。

「げふつー、ふおつー、はあ・・・はあ・・・」

全て吐き出してから、自分のしたことについて出し、もうほとんどのしたのに、喉に指を入れ、さらに出す。

何でだ、人を殺すだけじゃねえか。女にもできたんだぞ、なんでオレにできねえんだ？

何でだ・・なんで・・・ナンテナンテナンテナンテナンテナンテナンテナンテナンテナンテナンテナンテ

初めて、人を殺して人の命の重さが分かつた。

前の人生では、オレは好き放題して普通に「死ね」「殺すぞ」なんて言つて喧嘩してた。

もちろん、人は何回も殴つたことはある。

・・・思い出した・・・初めて人を思いつきり殴つた時、オレは今と同じような状態になつたんだ・・・

でも、何回もやつてるうちに慣れて・・・そうだ、慣れればいいんだ。なれたら、喧嘩の時みたいに普通に殺れる。

そうだ、何回も殺せばいいんだ。そうすればいいんだ。

そう思い、オレはその日、晩御飯を食べずに寝た。

「遅おおおおおおおおおおおおおおおい！……オレを待たせるとほ
いい度胸だなフレンダア・・・」

「ひい――――ゆつ 許して訳よ――」

「那屋——」

キレる麦野と涙目で謝るフレンダ。

はたかにみればイケメン不良が喧嘩を売ってねじか見えない
周りが自分たちを見てるのに気付いた麦野は、フレンダを引つ張つ
て路地裏に行く。

「たぐつ、テメーのせいで勘違いされるじゃねえか」

「いや……結局、それは全部麦野のせいつて訳……」

「ああん！？？」

不良顔負けのすごい顔でフレンダを睨む。

フレンダはあまりの怖れに声も出せず、涙も出ず、その場に座り込み、がたがた震える。

「うひ、せつせとしょづぜ。今回も人を殺すだけ・・うつーー！」

まだ・・・また吐き気が・・・

昨日から人を殺すのを考えるだけで吐き気がする。

しつかりしる！オレ！－今日はこれをこくはくするために来たんだ

ろうが。これくらいでへばつてんじゃねえよ！－

オレは何とか吐くのを抑えると、動けないフレンダを引きずつて目

的地に向かう。

・・・せつせとしょづぜ。今回も人を殺すだけ・・うつーー！」

辺り一面、真っ赤に染まる。

全部、オレが殺したやつの血だ。

オレはまだ息があるやつに向かって止めるメルトダウナーを撃つ。敵は跡形もなく消える。

今殺したので、だいたい30人くらいだな。

もう、吐き気はない。快感しかない。

そうだ、これでいいんだ。いちいち吐いてなんかいられねえ。オレはどんなことをしても進むんだ。たとえ人を殺しても。

「・・・フレンダ。あと何人くらいだ？」

「えへと・・・だいたい20人くらいね。結局、麦野にかかれはあつとこ'まつて訳よー」

「'まつ。わつわと終わらす・・・ぞーー」

固まつてたやつに撃つ。

わいつやと終わらせて寝よつ。そつしないと氣が持たない。

「おこおこ、逃げ回つてどじやねえよーー。」ハリのくせに手間かけさせんなあーーー！」

オレの性格も狂ってき始めた。

第6話 仲間 + 2

ある日、こきなりフレンダが変なことを言つ出した。

「 もひと仲間が欲しつて訳よーー！」

「 ・・・はあ？」

携帯をいじるのをやめて、フレンダを睨む。

恐がらせたつもりなのに、なぜか頬を染められた。ドミ?ドミのか?まさかフレンダがそんなキャラだったなんて・・・!!

「 バリ引くわ。近寄んな」

「 何でー?じゃつなくてー結局、今まはじや少ないつて訳よーもつと仲間がいるのー」

バンバンと、ポテトを食べてた手で机をたたく。

おいおい、これこのファミレスの机だぞ、汚くなるだらうが。

後で机を拭かせよう、フレンダに。

「 別にいいんじゃねえの?別に一人でも、オレが居ればすぐに終わるじゃねえか」

そういうたんだが、フレンダは納得しない。
めんどくせえな・・・

「だつて、もし大きな施設で協力してやらなきゃいけないときに入
数が足りなかつたらどうするの？やっぱり、後一人欲しい」

「・・・つまり、お前は喋る相手が欲しいのか？」

「なつなんで分かつたつて訳よ！－！テレパシー－！？テレパシー－
！？」

「馬鹿か。能力は一人一つまでだ。それくらいも分かんねえのかよ

「それくらいは分かつてるつて訳よ！」

「そういい、ない胸を張る。
・・・貧乳だな。

「今、何か失礼なこと考えなかつた？」

「別に？」

お前もテレパシーっぽいの使えんのかよ。

ブルルルルル・・・・ブルルルルル・・・ガチャヤ

「あ～？お前か～？安心しろ、今日は厄介」”とじゃねえよ。一人くらいアイテムに仲間が欲しくってなあ。一人よこせ。あんん？能力者だぞ、レベル4じゃないとだめだ。男でも女でもい「女子がいいつて訳よ！～」・・・どつちも女だ。じゃあ、よろしくな

電話を切る。

今、かけてたのは、「闇」で知り合つたやつだ。

脅してアドレスもらつた。

まあ、これで仲間の心配はねえな。

「う~し、サバ缶でも買いに行くか

「あ~、私も買つー」

俺たちは店に向かう。

「あなたたちが、『アイテム』ですか？」

フレンダをからかいながら、仲間が来るのを待つ。アイツは仕事だけは早いからな、すぐに来るだろ。

「なつてない！ いたつて正常…」

「お～、とうとう頭がおかしくなったか？」

「結局！ サバ缶は最高っ！ …て訳よ…！ …！」

俺たちは、サバ缶を大量に買い、アジトで食べている。大量に買つたら、なんかあのモヤシみたいだな。そう思いながら、二つ目を開ける。
うん、やっぱりサバ缶はうまいな。フレンダとオレって結構気が合うんじやね？

「かつこいいひと・・」

おつ、来たな。

なんか滝壺が変なこといつてたけど無視だ無視。オレはいたつて普通の顔だ。カツコイイなんてありえねえ。

とつあえず、血口紹介からだな。

「ああ、オレは『アイテム』のリーダー。麦野むぎの沈鳴しづなりだ。こいつはアホメア」

「ちよつ！違つ！…あつ、麦野のことは無視してね。私の名前はフレンダ＝セイヴェルン。よろしくって訳よ！」

フレンダが手を出すと、スカートの丈がギリギリのガキが握りかえした。
とあえず、オレのことを無視していいとかいやがったから拳骨5発くらわしといった。

「私の名前は絹旗きぬはた最愛さいあいです。超頑張りますんで。よろしくです

「滝壺たきつぼ理后りこう。よろしく」

オレはまじまじと二人を見る。

正直言つて、オレは『アイテム』に興味なかつたし、アニメは見てねえ、漫画は『とある科学の超電磁砲^{レールガン}』の一巻しか持つてなかつた。『アイテム』のメンバーつて個性豊かだな。

オレはふつと笑う。

すると、なぜかガキ3人がこちみて顔を赤く染めた。

「何で顔赤くなつてんだ？」

「……ちょっと超なんでもありますん……本当に……」

「……………今田の任務はなんだろうな

なんか滝壺が「掘れ」とか言つてたけど、何を掘るんだ?この地面をか?

「まつ、いいや。じゃあ、早速仕事に行くわ」

「 」 「 」 「 」

「んつ、元気がよろしい」

笑いあいながら場所に向かう。

これからある施設の中にいる人間を全員殺す。

第七話 筋トレ

あの口、オレは思った。

肉体戦の時のために体を鍛えた方がいいんじゃないかと。

「うひ、いつわけ子でお前らも鍛えろ」

「何で私たちも巻き込まれるんですか。超めんどくせーです」

「ん~?なんか言ったかにゃ~ん?あ~ぬ~は~た~?」

「いえ、超言ひません」

ギロリと睨み、絹旗を齧る。

絹旗は、すぐに先ほどの言葉を取り消した。
はつ、オレに逆らつんじゃねえよ。

「じゅつ、早速今日から行へば」

「ん?じり?..」

「じりじり・・ジム」

何だよ、その顔。

先生とかに教えてもらひの嫌なんだよ。異論は認めねえぞ。

「おいおい、どんだけ体力ないんだよ」

今、オレの隣には、ばてている二人がいる。
体力ねえな～

「む・・むものがありやせなんだ・・・よ・・」

「そりだよ！結局、私たちはか弱い女の子って訳よ！？」

「か弱い？どこにか弱い女子がいるんだ？」

「アーティスト...」

オレはねざとウロウロと周りを見渡す。

すると、二人がひょんぶよん飛んでオレの視界に入ろうとする。はつはつはつ、無駄無駄。180センチの身長のオレの視界にお前

ふたしたチビは入るねえよ

そういうと、滝壺を除いた二人に蹴られたので、一発ずつ至近距離からギリギリ外れるメルトダウナーを撃つといった。

さて、鍛え始めた日から、何か月も過ぎた。
あん？時間が経つのが早い？気にすんな。こんなことを気にしてたら人生損するぞ。
何を損するのか知らねえけど。

まあ、とりあえず。オレの体は程よい筋肉が付いた。
あれだあれ、細マッチョだ。
それに実践もしてみた。
とりあえず不良に喧嘩売りまくった。まあ、全部勝つたけどな。
これで肉体戦はとく大丈夫だな。
さて、そろそろ後ろのフレンダ達も相手を全員殺す頃・・・

プルルルル・・・プルルルル・・・プチ

「あんだよ、クソ女。邪魔すんな。じゃあな」

「アンタたちの暇つぶしになりそうな事件が起きたわよー。見てるだけで楽しいわよー」

「ああ、？連続虚空爆破グラビーン？だろ？これからそれを探すんだよ。じゃな

問答無用で消す。

まだ女が叫んでたけどまあいいか。

「さて。その連続虚空爆破を見に行きますか

「たのしみだね」

「はい、超楽しみです」

オレの後を、面白そりて3人が続く。

第8話 捕まえた

よく考えたら、どこで事件が起ころのかしりませんでした。
どこで事件起ころんだっけ？

「・・・確か友達が、お花畠のやつがでかいデパートの服屋の中で
巻き込まれてあるって・・・」

「うだつたよな？よく覚えてねえけど。
だく！こんなことならもつと友達に詳しく聞いてればよかつたぜ！
とらあえずお花畠だよな？お花畠・・・」

オレは周りを見渡す、すると、運よくそのお花畠のガキを見つけた。
なんだよあれ、頭パーか？

「何ですかあれ。頭超可哀そうな人ですか？」

「結局、人間つてのは人それぞれつて訳よ。そつとしておいてあげ
よう」

「あたまがおかしいの？」

「3人がなんか失礼なこと言つてんな。
そんな失礼なこと口に出すんじゃねえよ。」

可哀そつだろ。いくら頭が可哀そつでも

お前が一番失礼

てか、あんな頭してよく外に出れるよな。花とれば誰だか分からねえんじやねえのか？

何だ？周りのやつも、あまりの頭の悪さに気にしない様に気遣つてみない様にしてるのか？

いい人たちだな・・・

お前失礼すぎだろ

「なんだか視線を感じます・・・」

あっ、ごめんそれオレ。
がん見してるから。

まつ、とりあえずアイツについていけばいいんだよな？
だけど、オレ結構目立つな・・・なんか女子の視線が痛い。

それは君がイケメンだからだよ。リア充爆発しき

作者オレに冷たいな。

「・・・麦野・・・これは何つて訳よ・・・」

「ばれないように変装しないといけないだろ?『元壁だぜ』」

化粧品を片手に、オレは満足そつた顔をする。
たぶん、今のオレに顔はきらきら光つてると想ひ。

フレンダは黒い髪のカツラをかぶらせ、目元を濃くして目を大き

く。

絹旗は服装をジャージにして、髪の毛も括り、眼鏡。

滝壺はおしゃれな服を着せておしゃれな帽子もかぶらせて髪の毛もパーマにした。

よしつ！これで一目見ただけで分からねえだろ

ちなみにオレの変装は、女装だ。

いや、レベル5の第4位がストーカーしてるとか言われたら嫌だし、これしかないとだよ！

髪の毛がパーマがかかつた金髪のロングのカツラをかぶり、軽く紅をさし、肩幅が分からぬ様に肩のところが毛でおおわれている服。もちろんズボンだ。スカートとかありえねえ。

「・・・・麦野、似合つてる」

「そんなこと言われても嬉しくねえ」

女装をほめられも嬉しくないんだよ滝壺。
まあとりあえずこれで目立たないだろう。
オレ達は花ガキの跡を交代で追いかける。

最終的につけたのは、大きなデパートだった。

ここか、ダチが言つてたのは。ここで事件が起るんだ。

丁度暇だつたから犯人をボコッて捕まえて警察にでも突き出すか。
しかし・・・なんでだ？視線が痛いまだが。もしかして男だつて
ばれてんのか？

だとしたらやべえな。事件みたらさうと帰ろう。

そう思つてたら、放送が流れた。

能力を感じしたようだ。とつ、さつさと店の外に逃げて路地裏に行
こう。

俺たちは急いでデパートをでる。

「行くぜ」

「超了解」

さつさと犯人気絶させて帰らひつ。
もつ視線が痛すぎる。

オレは路地裏に向かう。

すると、不気味に笑いながら学生が路地裏に入つて行つた。
ラツキー、犯人あいつだな。

オレはにやりと笑いながら学生の跡を追つ。

「くくく・・今度こそ逝つただろう・・・素晴らしい・・・素晴らしい
い力だ・・・」これで僕を馬鹿にしたやつらを吹き飛ばして

「よお、ガキイ。」んなところで何してんだ?」

「...?」

ひとりで盛り上がつてたガキに声をかける。

驚いてる驚いてる。その顔が一気に恐怖に変わるとさが一番面白い
んだよなあ・・・

「邪魔だからさつさと捕まつてこい」

「ひいっ...!」

ズドオンツ

メルトダウナーが、ガキの顔のギリギリを通る。
一気に恐怖の顔になりやがった。
いいねえ、その顔。

「何の力もないやつが、めんどくさいことしてんじゃねえ・・よお
！！！」

「ぐふっ・！」

腹に蹴りを入れる。

内臓大丈夫かなあ・・とつ・・！

ズンッ・！

「げはあつ・・！」

もう一発蹴りを入れる。
すると、ガキは吐きやがった。

「おこおこー」の程度かよ「ハリ野郎……もつとオレを楽しませ……

」

いや、待て。直ぐにあのガキが来るはずだ。
ここは引いた方がよさそうだな。

仕方ねえ。

「命拾いしたな

「ぐう・・・ぐはあ・・・

腹を押されて苦しそうに息をするガキを置いて、俺たちは路地裏から何事もなかつたかのように出る。

すると、すぐ後ろでガキの声がした。

胸糞わりい・・いつかテメーを地獄に叩き落としてやるからなあ・・

・覚悟しつけよ超電磁砲ヘルガン

第9話 つまんねえ、もつと

俺は大声でいう。

すると、周りのやつらがオレを見る。
チクショウ、見てんじゃねえよ。暑いもんは暑いんだ！！

「麦野、プール行きたいー！」

「ついでにあの世行つて来い」

「何で!?なんか麦野つて私に冷たいって訳よ!」

「それはだな・・・お前の反応は面白いからだ」

「ひどい！！」

フレンダで遊びながら、オレは、変わった曲が流れるのを待つ。
そろそろ、クソガキが昏睡状態のカスどもの目を覚まさせるころだ。
・・・・てか、ホントに熱い・・・水分が全部無くなつて死んじま
うぜ・・・
あつ、そりいえば！

「プール借りっぱなしだったな・・・」

ぱやつとつぶやく。

すると、フレンダが食いついて来た。
よほど熱いらしい。

「ホント……？」うよー！結局、このままだと今日はもういいかも
何もないうて訳よ」

「……せうだな……行くか」

「本当にですか……？」超感謝します……。」

「浮いて漂うスペースある？」

「……滝壺……泳げつか」

浮いて漂うスペースってお前……事情を知らねえ奴が見ればおぼ
れた人にしか見えねえぞ。
せめて、バタ足でもいいから泳げ。

立ち上がりうとしたその時、不思議な曲が流れ始めた。

なんだ・・この曲・・・五感に訴えるような・・・言葉じゃ表せな
い不思議な曲だな・・・
まといいか。これで昏睡状態は溶けるはずだ。もうオレには関係ね
えし、正直、こつから先の話、知らねえんだよ・・・
あんまり友達と、とある魔術の話しなかつたからな・・・

「・・・不思議な曲・・・」

「ほんと、どうでもいい。行くぜ」

そうだ、もうオレには関係ないんだ。

これからは適当に過ごせば、あのガキと会つだら。

その時は・・・アイツを跡形も残さず吹き飛ばす！――！

あれから、日が過ぎた。

オレは今、任務をしている。

邪魔者を消すつていう任務を。

「ひいっ・・・ひいっ！…！」

「助けて・・・げはあつ！…！」

「助けて？おいおい、何敵に助け求めてんだよ。助けるはずねえだらうが！」

オレは、男の腹をける。

男は胃の中のものを血とともに吐きだし、呻ぐ。
さらりと腹をけると、もつと血を吐き出した。

「つまんねえな・・・つまんねえな・・・やつぱテメーら」ゴミカ
スじやあ相手になんねえな・・・

後はフレンダに任せて、オレは電話をいじり始める。

はあ・・・最近つまんねえな・・・ガキとも会つてねえし。
つまんねえ・・・つまんねえつまんねえつまんねえつま
んねえつまんねえつまんねえつまんねえ・・・

「うれしかったんだね。でも、おまえのことは、もう少しやる気があるみたいだな。」

ハツ当たりで、近くにいた、まだ息のある男の腕を思いつきり踏み、腕を碎く。

まだだ・・・・まだ足りねえ・・・もつと悲鳴をあげろ

もつと自由を出す

もっと恐怖しろ

もつと無様姿で泣き叫べ

もう一度、足をあげ、男の顔面めがけて下す。男は、田をつぶり、来るであろう激痛を待つ。

「なんだよ、クソ女」

くそつ、このイライラしてる時に・・・
そう思いながら、相手の話を聞く。

しかし、そのイライラは収まってきた。
内容が面白かったからだ。

「防衛戦」

頭を使うため、少しは面白くなるだろ？
オレ達は残りを始末し、車に乗り込む。
目的地に向かう最中、詳しい説明を受ける。
おもしろそうだな・・・
オレはにやりと笑う。

すると、3人があれこれ言い出した。

「いい？麦野。絶対に傷ついたら駄目だよ？私たちが頑張るって訳
だから」

「はあ？別にいいだろ、オレの体なんだから」

「ダメです。超駄目です。せっかくきれいな顔が傷ついてお嬢に行
けなくなつたらどうするんですか？」

「別にいいし。結婚するきねえし」

「それはそれでもつたいたいないよ? 麦野」

「・・・なんで?・・・」

「ん?今、この話どうでもよくね?」

目的地につくまで、オレは3人にいろいろ言われ続けた。

こら運転手、笑うな。

第10話 作戦

目的地に着いた俺たちは、すぐに研究所の本部に行き、カメラなどを全て切つてもう。』

敵は、中心部の大きな機械があるところを狙つ、だから、その近くで俺たちは戦う。

カメラなんかあってもオレがメルトダウナー撃ちまくつて壊しまくるから意味ねえだろ？だから切つてもう。

施設は、2つ・・か・・・よしつ！

「フレンダ。お前はここに残つて敵が来るのを待て」

「ええつ！？私だけ仲間はずれ！？」

「違うわ

「いいか？残りの施設は2つある。絹旗は、もう一つの施設に行つてもう！」

「やっぱり結局仲間外れつて訳よ！－ゲフツ－！」

「人の話を聞け――――――！」

オレはフレンダの首を絞めて、静かにさせた。
死にそう? 大丈夫だ、コイツはゴキブリ以上にしぶとい……と、
思う。

そのうち、フレンダがオレの手を叩いてきた。

「む・・むぎの・・・! 苦しいって・・訳よ・・・」

「よし、静かになつたな」

オレは絞めるのをやめる。

話した途端、フレンダは必死に息を吸う。その背中を滝壺が優しく
なでる。

いい子だな、滝壺は。

「いいか? 襲撃者は単独犯であると推測されてるけどな、一方の襲
撃が陽動であると、可能性を捨てるべきじゃねえんだ。防衛組、つ
まり縄旗は、施設襲撃の報を聞いても対処は俺たち、遊撃隊に任せ
て自陣を堅守する。・・・頭がすっからかんのフレンダでも意味が
分かつたかにゃーん?」

オレがそう説明すると、フレンダは仲間はずれにされたんではない
と分かつて顔を輝かせた。
すげー、変わりよう。

「分かつた！－！それじゃあ仕方ないね　・　・　・　でも・・」

「…」（せりあわせ）

「頭がすっからかんつて納得いかないわけよ――――――!――!」の
つ――このつ――!

オレをポカポカと叩き始める。

「はつはつ、効かねえな。まあ、オレに本気でしたらいどりなのかな。
・・フレンダは一番分かってるよなあ？」

「うー！」

ピタッと動きを止める。

置かれてゐる。

ある時は、至近距離からの、ギリギリはずれるメルトダウナー。あるときは、2階から宙吊り、ある時はプロレスの関節技10連発（10秒間）ある時は刃物を振り回しながらの楽しい鬼ごっこ。ある時は・・・ありすぎて全部言つてたら口が暮れるな。やめよつ。

「それじゃあ、麦野。行つてきます」

۱۰۷

オレは笑顔で言う。

絹旗の顔が少し赤くなつたんだが・・・いきなり風邪ひいた？まじ？慌てて引き止め、熱が無いかどうか、でこ同時にくつつけ、大丈夫かどうか聞く。そしたら、顔をさらに真っ赤にした、焦つて逃げるように行つてしまつた・・・オレの顔恐かつたのか？

「・・・オレの顔つて恐い？」

「「全然」」

「そうか・・・」

だつたら何で逃げるんだよ絹旗。オレは少し傷ついたぞ。

～～～アレンダ～～～

「五」

私は、ヌイグルミに囮まれながら、あおむけに寝転がる。
そして、先ほどの縄旗と麦野とのやり取りを見て・・・腹をたて、
ヌイグルミを投げ飛ばし、ものにあたりはじめる。

麦野とでに近づいて……で、近づいて……繩旗するい……わざと顔を赤

くしたんでしょう！？ そうでしょう！？

さすが、見えそうで見えないギリギリを考えて計算してる絹旗！ 結局頭賢い！！

・・・はあ・・・私も能力者なら・・・頭もよくなつて麦野とラブラブする作戦を立てまくれるんだけどなあ・・・結局、自分が持つてる才能が無かつたって訳よ・・・

「ライバル多いもんな・・・どうにかして私に惚れさせるんだから・・・」

絹旗に八つ当たりしたつてしまふがない。

いまは、どうにかして氣を引かない。麦野の美貌だから、男子の中でも麦野に惚れてるやつはいるだらうし・・・女子なんか、麦野を見た途端、目がハートマークになつてるし・・・

・・・・・・・・・・・・ 麦野は私のものつて訳よ！・・・絶対に恋人になるんだから――――――――――――――――――――――

私はまた暴れ始める。

その時、足音が聞こえた。

暴れるのをやめ、私はニンマリと笑う。

そうだ、ここで侵入者を一人で倒して、麦野に褒めてもらおう。

私が強いことが分かれば、結局、私と麦野の距離はぐつと縮まるつて訳よ！！

そうと分かれば・・・直ぐにいかないとね

私はスキップで侵入者のもとへ向かう。

第1-1話 フレンダーヴS御坂（前書き）

スパムが来たため、ユーザー以外の感想は受け付けない様にしていましたが、誰でも感想を送れるようにしました。

感想でもいいし、どうすればよくなるとかでもいいです。

しかし、私が不快になる発言や、嫌がらせなどのスパムなどは、問答無用で消します。そのとおり、分かってください。

第1-1話 フレンダVS御坂

（――― 3人称―――）

フレンダは早速、侵入者の元に行き、仕掛けの準備をする。すると、侵入者のだいたいの姿が見えてきた。

（顔は暗くてみえないわね・・・まつ、いいか。結局死ぬんだし）

そう思い、相手について深く探るのはすぐにやめた。

（相手は電気使い。^{フレクトロマスター}いつものようにリモコン式で導火線をつけてたら逆に支配されそだから今回は用意してないのよねー。逃げながら火花をつけないといけないから・・・今回は楽しそうね）

そう思い、フレンダは線に火花をつける。

これは、フレンダがよく使う道具。これで、ドアなんかも焼き切れる

（いけ――！――！）

直ぐに、天井が斬られる。

侵入者の頭の上にすごい音を立てて、斬られた瓦礫が落ちていく。フレンダは死んだと思った。しかし、敵は無傷で立っていた。顔をしかめる。

（瓦礫が一つも当たらない……？磁力で落下物の軌道をずらしたか……どうやら、電気使^{エレクトロマスター}いってのは本当のようね……それにあれだけ大きな瓦礫を全部ずらしてくるから、レベル4くらいかな？まつ、たとえ強くても意味はないんだけどね）

ニンマリと笑い、また火花をつける。

今度はただ焼切るだけではない、線の先には、爆弾を入れてある人形を置いているのだ。

直ぐに1つ目が爆発し、敵はそこらへんにあつた壁の破片みたいなもので防ごうとする。しかし……

（結局、どれだけ頭がよくても、私の読み通りって訳よ……）

そう、瓦礫の中には電気に反応して爆発する爆弾があるのだ。敵はすぐに気づいてしまい、瓦礫を飛ばす。

（おっしゃーい。気づかなかつたら殺せたのに……やつさん殺して麦野に褒めてもらおう）

そう思い、次々に線に火花をつけていく。
だが、敵はしつこく、なかなか攻撃が当たらない。
次第にフレンダは焦り始めた。

麦野

「おっ、フレンダの所に敵がきたみたいだぞ。行くか

「うん」

オレは立ち上がり、用意してあつた車に乗り込む。
とつ、その前に・・・

「これを忘れたらいけないんだよなあ・・・今回も頼むぜ滝壺

「うん、まかせて」

オレは体晶を手の上に転ばせる。
これがあれば、俺たちから逃げられるやつなんかどこのにもいなくな
る。

だけど、滝壺の体に負担がかかるからな・・・いちよう、大丈夫
か聞いとくか。

「おい、滝壺。本当に大丈夫か？お前、しんどいとか寝不足とかな
いか？」

「ないよ。大丈夫だよ麦野。わたしがんばるからね」

「・・・いいか？きつくなつたらすぐに能力を使うのをやめろよ。

お前は自分を大事にしろ

「うん・・・ありがとう、麦野」

「んつ、分かればよろしい。じゃつ、行くぜえ」

俺たち一人は、急いでフレンダのもとへ行く。
アイツ、今ごろ敵に追いつめられていねーだろ? な・・?

~~~~フレンダ~~~~

なんなのよこの女~~~~~！？

磁力で地面を持ち上げて線を断ち切るわ、クモみたいに壁を走るは・・・！

今はまだ嘘を信じてこいつちが有利だけど、結局すぐにこんな嘘ばれるかもしれないし・・・。

麦野~~~~！早く助けてつて訳よ~~~~！――――――！

麦野の予想通り、追いつめられて――

は！ダメダメよ――麦野にやればできるってことを見せるんだから――

麦野との距離を縮めるんだから――麦野の彼女になるんだから――

そのためには――」のクモ女を・・殺す――！

私は、靴のかかとに仕組んでいた刃物をだし、回し蹴りをする準備をする。

そうねえ・・・最後に少しだけお話しようか

「最初、私はアンタに人の人生なんかどうでもいいっていったでしょ？でも、止めを刺す時だけ灌漑深いものがあるのよねー」

「・・・・・」

「命を積む、まさにその瞬間、私は相手の運命を支配した気分になれるの？」

「・・・・・！」

ふふ、知りたい？言つてあげるわよ・・・

「結局、コイツは私に殺されるためだけに生まれてきたんだってね？」

「・・・・・」

もつ、ショックすぎて何も言えないみたいね……さて、最後の仕事と行きますか。

さあ、いい叫び声を……

「聞かせてちょうだい……」

私は渾身の回し蹴りを敵の横腹めがけて放つ。これで、相手は腹がえぐられる、はずだった。

「・・・ふざけんじやないわよ・・・運命を簡単に受け入れて・・・ふざけんじやないわよ・・・当たり前のよう受け入れて・・・ふざけんじやないわよ・・・！」

「げっ！？」

ギリギリのところに腕で塞がれた。くそっ！もろいのに・・・

！？

そう思つてると、次第に相手がなぜか怒り始めた。なつなに！？なんか地雷踏んだ！？

だったら早く逃げ・・・

「ぐえい！？」

首絞め・・・・・!？なつ、なるほど・・・「れなら電気技なんてい  
らな・・・てつ!」このままじややばい!…やばい!…やばい!…  
いんの・・・調子にのるんじゃないわよ!…!

私は相手を投げ飛ばす。

息が・・・首が・・・！－くそつ－！

そう思つたその時、相手と私を挟んで、極太ビームーが通つた。

「よお、パンチだなあ、フレンダ

「彼等が何をやるか知りません。」マイダーリー

～～～3人称～～～

(なんなによ今日は！－！厄日！－？)

またもや新たな敵が現れたことで、御坂は焦っていた。  
ひとりでもこれだけ苦戦たのに、さらに2人。勝負すれば確実に殺  
される。

だが、御坂の目的は勝負ではない、この施設を壊すこと、それなら、  
なんとかできるかもしれない。

しかし、そんな考えは男性を見て、吹き飛んだ。

男とは思えない美しさとかっこよさを兼ね備えた男性。  
一瞬、御坂は見とれたが、すぐに頭を振り、断ち切る。

(てつ！何してんのよ私は！相手は私を殺そうとしてる敵よ！－！そ  
れに私には・・・)

誰も好きな人などいないはずなのに、頭にあの不幸少年が浮かんだ。顔を赤くし、頭をかきむしる。

（なんであんな奴の顔がでてくるのよ…………ベッ…別に私はアイツのことが好きじゃないのに…絶対好きじゃないのに…）

そんな御坂をみた麦野は、可哀そつなものを見るよつな目で御坂を見た。

「何してんだ？あのガキ……てか離れるフレンダ……くつくな！…てかオレお前のダーリンじゃねえし…馬鹿か…！」

「麦野……麦野……（涙）」

「だああああああああああ……くつくなあああああああああああああ……」

腰にへばりついて離れないフレンダを離そうとするのだが、馬鹿力が、全然離れない。  
どちらも、しばらくやつしていた。

## 第1-2話 犯人は超電磁砲

お互<sup>い</sup>い、落ち着いたところで、俺たちはやつと戦うこととした。

さつきまで何してんだオレ・・・カツ「悪

まあ、いいか。今から楽しいお仕事がはじまるからな。

「さ<sup>ー</sup>て・・・ど<sup>ー</sup>をそ<sup>ー</sup>グシャグシャにしてやるひつかな? 可哀そ<sup>ー</sup>う  
な電撃<sup>エレクトロマスター</sup>使い?」

(こいつ・・・私がレベル5つことを知らない・・・)

な<sup>ー</sup>んか見たことある顔だなあ・・・? あれだアイツ。あのクソ忌  
々しい第3位。

馬鹿正直に顔写真なんか乗せやがつて。  
レベル5で写真なんか乗せてんの、削板とクソガキだけだったなあ?  
まあ、そのおかげでいちいち能力なんか見なくていいんだけど・・  
とつ、その前に・・・

オレはフレンダを見る。

フレンダはビクッときが付くくらい肩を上がらせた。

そんなことを無視して、オレはフレンダに近寄り、拳を振り上げ・・

こつんと、かなり弱く頭に振り下ろした。

フレンダは力こじつけられると想つたんだろつ、涙田で驚いてこつちを見てる。

オレはため息をついて、侵入者のほうを見る。

「馬鹿か。けが人相手に本氣で殴れるか」

「麦野・・・・?」

待て、待て待て。なんか最後に?がついたような気がする。

オレはフレンダをそっとみる・・

すると、フレンダが顔を赤らめて体をくねくねさせていた。  
おええ・・・あのクソガキにくつづいてる百合の風紀委員ジャッジメントみたいだ  
な・・・

オレは必死に吐くのを我慢する。吐いたら駄目だ・・・フレンダが  
傷つく・・だから今のフレンダは見るな。  
見たら吐くから。

とつ、とりあえず・・・

「滝壺。死なない程度に使つとけ」

オレは滝壺に体晶を投げる。

直ぐに滝壺は体晶を使う。

これで、もう相手は地球の裏側に行こうが逃げられない。

オレは向かつてきた電撃を曲げ、また原子崩マルトダウナーしを撃つ。

「それにしても、壁に張り付いて逃げ回るなんてなあ……まるで  
クモみたいだな。クソ野郎」

「……」

何か言つたかと思えば、相手は氣体が入つてゐる壺を壊してきた。

（何のつもりだあ……？こんなもんじやへりまじにしかならね  
えし、たとえ田へりまじとしても直ぐに晴れる……）

そんなことをしてたら、オレが開けた穴に、侵入者が逃げた。

「麦野。 にげたよ」

「あつー・マジだ……？ かといつて追いかけるのもどうかし  
なあ……やつぱつーいこは……」

オレは手を侵入者に向ける。

「『『メルトダウナー』原子崩し』で跡形もなく消し飛ばすしかないよな

侵入者に向かつて人を跡形もなく溶かす・吹き飛ばすレーザーを発

射する。

「はははは……溶けしまえよクソ野郎……！」

「ぐう……」

「ああん？ はずしたか？」

チツ、もう少し右にしどけばよかつたな。

そう思いながら、オレは歩き始める。

相手はフレンダのおかげでかなり体力も削られてるし傷は負つてる

・

後は・・・

「逃げられない様に回り込んで・・・じわじわ追いつめるだけか」

「任せてね、麦野。私がんばるから」

「ああ、頼んだぜ滝壺」

さあ～て、哀れな子猫ちゃんはどうあるのかいや～ん？

今、オレは侵入者で遊んでる。  
だけど、そろそろ飽きてきた。

「なかなか当たんねえな・・・

「任せて麦野。施設中に仕掛けしまくったから」

「・・・まあ、それもあって相手の体力はドンドン減つて行っている  
な・・・」

もう、オレ一人でも大丈夫か。

そう思つて、メルトダウナー原子崩しをまた放つ。

すると、メルトダウナー原子崩しが強制的に曲げられた。

なんでだ・・・? オレの原子崩しを曲げられる電撃使いがいるとし

たら・・・

レールガン  
超電磁砲ただ一人

・・・・なんだ・・・・そういうことかよ・・・・  
どおりで、クソガキに似てると思つたんだよなあ・・・・侵入者は  
第3位様だったってことかよ・・・・

「ふふふ・・・・はははははははは!――!――!

オレは笑う。

フレンダ達が驚いてオレを見るがどうでもいい。

超電磁砲レールガンがここにいる!! オレは運がいい!! ここなら、アイツを殺せる!! 誰にも見られずにだ!!

嗚呼、本当に運がいいな・・・それに比べてアイツは運が悪いなあ・・・

今日で、自分の命が無様に終わるんだからな。

「むう・・・麦野・・・?」

フレンダが心配そうに話しかけてきたが、今のオレの耳には何の音も入らない。

「はははははは!! そだ!! 小娘がオレの上に立つなんてことするからだよ!! 立たなかつたらオレに殺されることはなかつたのにあ・・・ 今日はさうじつにい日だなあ!! あはははははははは!!」

「麦野・・・」

とつ、その前に2人を避難させねえとな・・・

「フレンダアー! 滝壺おーーてめえらは逃げろ」

「なつなんで!? 私たちも一緒に・・・!」

「こいつはオレの獲物だ!! てめえらは邪魔だ! 逃げろ!!」

「・・・分かつた」

しぶしぶと、二人は帰っていく。

これでいいんだ・・・滝壺はそろそろ限界が来てるし、フレンダはあの小娘との戦いで怪我をしてる。

オレがアイツらの分までしつかりすれば。

「さあて・・・来ないかねえ?クソ野郎」

もう少しでお前を跡形もなく消してやる!ー!

## 第12話 犯人は超電磁砲（後書き）

百合<sup>ゆり</sup>・・・女性の同性戀。またはそれに近い近愛のこと。

## 第13話 ぶち殺し

オレは待つ。あのクソガキを殺すために。ついに、今日でのクソガキをぶち殺せるんだなあ・・・ゾクゾクするぜ

とはいっても、クソガキがなかなか来ない。何してんだあ？まさか逃げやがったのか？だが、そつとすれば機械を壊してから逃げるはずだ。

やつの目的はそれだけ、それをしない限り帰るとは思えない・・・まだ大きい音がしてないからまだ逃げていないはずだ。

・・・・今のうちに足を休めとくかあ・・・

オレはその場に座る。

これから動き回るからな、体力を回復しとかないとな。そう思つたとき、足音が聞こえてきた。

「やあーと来たか。ずいぶん策を練つた来たようだな」

ガキの手元を見て、オレの額に青筋が浮かぶ。

フ・レ・ン・ダ〜！人形を片付けないで帰りやがったのかよ・・・！

後でお仕置きが必要みたいだなあ・・・まあ、コイツをぶち殺してからだけだ。

「・・・ほかの2人は？」

「ああん？」

「んだよ、レベル5同士の戦いに仲間を巻き込むとでも思つてたのか  
よクモ女。」

オレは立ち上がり、手をポキポキ鳴らす。

「それなら安心しろ。2人は帰らせた。だから一対一で勝負しよう  
じゃねえか。まあ、オレのこの言葉を信じるか信じないかはお前し  
だいだぜ？常盤台の電撃姫、レベル5の第3位、超電磁砲の御坂美  
琴」

「...」

ふふ、驚いてる驚いてる。そうだよな？敵に自分の正体がばれてん  
だからな。

・・・さてと、無駄話も終わりにしようか。

オレは笑う。

すると、クモ女が不思議そうにこっちをみてきた。

「くくく・・・オレは今嬉しいぜ？こっちは年下の、しかもまだケ  
ツの青いクソガキが自分より上だつてことに怒り続けてたんだ。だ  
からなあ・・・今日でそのクソガキをぶち殺せると思えるとなあ！  
！-嬉しくてたまんねえんだよ！-」

(相手は私の正体を知ってるし、私より下の男・・・一つ下は確かに  
・・『原子崩し(メルトダウナー』・・・)

「今更オレの正体を知つても無駄だ。お前は今から死ぬんだからな」

「やあ、じゃあ、アンタと話すことは何もないわ・・・ね!..」

ガキはフレンダの人形を投げてきた。

そして、能力で爆発させてきた。

オレは能力を使って爆風を防ぐ。

なるほどねえ・・・アイツの残りの体力も電気も少ないからフレンダの爆弾で補おうってのか・・・  
だがなあ・・・

「それじゃあ、オレに勝てないって言つてるのと同じだぜ?..」

「それでもいいわよ」

もう一個投げてきやがつた。

フン、こんなもん直ぐに撃ち落して・・・

そう思つて、メルトダウナーを撃つた。

しかし、当たらなかつた。人形が逃げたからだ。

「なんだ!? 人形に何か仕込んでるのか! ?」

オレが驚くと、ガキがやりと笑つてきやがつた。

『気に食わねえ・・・気に食わねえんだよその顔があーー! !

「ええ、操れるようにネジとか入れさせてもらつたわ」

「ちいっーめんどくせえ」とを・・・・・!

何発かメルトダウナーを撃つと、やつと人形を壊せた。

余計な手間かけさせやがつて、死ぬのは同じなんだからあがくなよ  
ガキ。

「やつぱり一つだと集中できるわよね・・・けど、手が回らないくらい  
あつたらどうかしら?」

「ーーー?」

暗闇から40以上はあるフレンダの爆弾が出てきた。

クソ・・・どれだけ爆弾仕掛けでんだよフレンダわあーー!

動き回る人形をオレはひたすら撃つが、全然当たらない。

・・・・・ しょうがない、ここはあれを使うか。

オレはポケットに手を入れ、それを出す。

「見たところアソツの能力は弾幕を張れるものじゃない・・・だつたら・・・！」

「数で押せば勝てるってかあ？なあ？そりなのかな？」

オレはそれを指で上に跳ね、狙いを定める。

オレの目線の先には無数の人形・・・つぎつぎにな。

ドンッ！…シユババババッ！

「…？」

はは、驚いてる驚いてる。

そうだろうなあ・・・いきなり攻撃が多くなったんだからなあ・・・

オレはそれを持ち、ガキに見せる。

「シリコンバーン拡散支援半導体。自分の弱点を補うために工夫をするのは当然だろうが」

「ぐつ……」

ガキは顔をいがませる。

ほらあ。もうあつといつ間に4・5個だ。

そう思つた時、ガキが突然走り出した。  
はん！やつぱりガキだなあ！！ オイ！！

オレはすぐにガキの直ぐ近くにあつた人形を撃つ。  
これでもうお前の近くに人形は・・・

そう思つた時、ガキの体の後ろから人形が現れた。

(こいつー自分の体で見えないようにして・・・だがなあ・・・)

向かつてきた人形をオレは曲げる。

「忘れたのかよ！..オレもてめえの能力と似たようなもんだってよ  
お！！」

「・・・！」

「もしかして勝っちゃったとか思っちゃったかにゃーん？」

俺はじりじりガキに近寄る。

やつと・・やつとコイツをぶち殺せる・・・・・

「最初から勝負は決まつてたんだよ！超電磁」ケルガ

ガキの能力を言おうとしたその時、オレの頭に激痛が走り、オレの目の前が暗くなってきた。

「アンタこそ忘れたの？鉄塊しこんだつていつて・・・

ガキの言葉を最後まで聞くことができないまま、オレは意識を手放した。

## 第14話 自分だけは駄目だ

・・・・暗い・・・痛い・・・何か思い出せそうな気がする・・・  
なんだか・・・この映像は・・・

「いて」

そういう、オレは頭に手をやる。  
しかし、そこには何もなかつた。たんこぶもだ。なのに、痛みは感じ  
じる。なんだよこれは・・・

なんで、死ぬ前の世界にいるんだ?

しかも、今なぜか制服きてるし、鞄もつてるし・・・学校いるし・・・  
・なんか周りからみられるし・・・なんなんだよーこれはあーーー

オレは頭を押さえ、必死に考える。

なんでオレはここにいるんだ!? 確かあのクモ女にやられたはずじ  
やあ・・・

「兄貴…買つてきやしたぜ…昼飯…！」

「…………え？」

「え？」

・・・まさかこいつ・・・死ぬ前の子分だった西岡じゅねえかー…?  
あれー?まさかマジでオレ、昔に戻ってるのー?  
まあ、それは後にしようか。腹減ったからな。

といふわけで、前のように屋上で一人昼飯を食つてゐるオレ。

・・・・・懐かしいなあ・・・・・懐かしいのに昨日の「」とのように思えて記憶もハツキリ残つてゐる。

「それはね、君がまだこの世界で生きたかつたつて思い続けてるからだよ」

「うかうか、やうなのか。

「あだだだ！－間接技をしないで！－いくら神様でもこれは痛い！－痛いつて！－」

「やめてほし」のなら、なんでもたいるのか教えやがれこのクソ神

「教える－－教えるからやめて－－！」

しうがない、やめるか。

オレはしづしづ技をかけるのをやめる。

なんか神様が「骨があーーーヒビ入つたつてえー」とか言いつてるけど知らねえ。お前が悪い。とりあえず本題に入ろうか。

「でつ？さつきの葉はだつこつ」とだ？そしてなんでオレは「」にこるんだ？

「いてて……せうだね、本題に入らつか」

・・・わつわとオレの質問に・・・

「答えやがれこのクソ神――――呪いて伸ばして捨てるが、アハ  
ア――それかスライスするぞボケエ――」

「ひいいいい――！」つゝめんなさい――・・・じゃ、なくつて――  
・・・貴方はまだ、この世界で生きたかつて思つてゐる

「当たり前だる。誰のせいでポッククリキッカリ死んだと思つてゐる  
だ」

「ぐう・・・私のせいですよ・・・じゃ、なくつてえ――だからずつ  
と記憶に残つてもいるし、昨日のように思えるんです。・・・・アナタを殺したのは私です。それは言い訳をするつもりはありません

「言い訳したら・・・ブ・チ・ロ・ロ・シ・カ・く・て・い・だぜ」

「しかし、そうきれいじとを言つて、許してもらおうとも思いません。だから、あの時、もう会うのは最後だといった後も、貴方を元の世界に戻す方法を探し続けました」

おおう、もうひとつまねえんだな。・・・それほど真剣な話つて訳  
か・・・

「そして、ついに見つけました。今は、貴方に本当に他の世界に戻るのか聞きにきたんです。元の世界に戻りたいですか？」

「おおー! あつたりま・・・え・・・」

オレは声をだんだん小さくしていく。

元の世界に帰れば、オレはまた、あの時のよつに馬鹿なことをする。それでも、好き放題にして楽しかった。

今の世界で過ごせば、好き放題にはできない、命は危険はある。それなら、元の世界に戻つた方がましだ。

でも・・・そうすればどうなる? フレンダ、絹旗、滝壺とは合わなかつたことになる。

あの優しいおふくろと親父ともだ・・・

・・・そんなの嫌だ。絶対に嫌だ。あの幸せな時間を忘れたくない。だとしたら、オレの答えは決まってる。

「・・・ 戻らない」

「・・・ 本當ですね? 今、貴方は重大なことを決めようとしてるんですよ? 今、このチャンスを逃がせば、もう一度と戻れなくなります。それでもですか?」

「それでもだー! オレは絶対に戻らねえー!」

アイツ等を置いて、俺だけが幸せになるのは駄目だー!  
仲間ならアイツらと一緒にいて一緒に幸せになるんだ!

このクソ神に甘えるな、自分の力で幸せになれ。自分の力で仲間を護り、幸せにしろ。

「……そうですか……なら、もうこいつではないですね……では」

そういうと、ガキは消えた。

これでいいんだ。オレには、ひとりだけ幸せになる資格なんかねえんだ。

人の命をオモチャのよつにこの手で消してきたオレになんかに……資格はねえ！

そう思つた時、頭の痛みがひどくなり、オレの目の前はまた暗くなつた。

目の前が明るくなり、見えてきたのは、暗い天井だった。  
血が流れている部分を抑え、オレは立ち上がる。

・・・オレがやらなきゃいけねえ・・・オレがやるんだ・・・たとえ  
この身を切り裂かれようと。

## 第15話 逃げられたけど・・・

「痛エ・・・痛えなチクショウ・・・」

斬れた部分を抑えながら、言つ。

徐々にオレの怒りは上がっていく。

あつ、駄目だこれ。もうキレてもいいよな?いいよな?

そう思いながら、壁まで移動する。

(あのクソガキイ・・・ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・だ  
なあ・・・)

イライラしながらガキを待つ。すると、大きな爆発音がした。

(・・・ガキが中心部分を破壊したのか・・・)

だと、したら。帰るにはここを通らねえといけねえ。待つてれば絶対にここに来る。・・・そうだなあ、アイツの後ろから近付いてメルトダウンーぶつ放して体に穴開けてやるつ。ギヤハツ!どれだけ血が噴き出るかな~

タツタツタツ

おっと、来たみたいだな。

そう思った時、急に頭の痛みがひどくなり、先ほどのことを思い出す。

そうだったなあ・・・あのガキ、オレに血を流せやがったんだよなあ・・・殺す。

オレは、オレが居ないことに驚いてるガキの後ろにそっと近寄り、撃つ準備をし、撃つた。

ドンッ！――

「……？」

「え・・・といでかわしたか・・・だけど、隙だらけだぜ。」

オレはガキの腹に思いつきり蹴りを入れる。

防ぐことができなかつたガキの腹に足が食い込む、ガキは吹っ飛ぶ。地面に落ちると、苦しそうにのたうちまわり始めるのを見て、オレは思つ。

(ここのなクソガキがオレより上で、オレが下あ？・・・なめてんのかよ。ここの)

オレは頭を抑え、ガキに近づいていく。

もう、オレの怒りはMaxなんだよなあ・・・

「おじおい、のんびり寝てんじゃねえよ。今から、オレがやられた分をテーマに兆倍にして返すんだからよお！――無様に逃げ回って死ねええええええええええええええ！」

「……」

至近距離のメルトダウナーをよけやがつたな。なるほども、すばし

っこいやつだなあ・・・  
能力を使い、壁から壁へ飛び移るガキに、オレは怒りを思いつきり  
吐き出す。

(そんなもん、勝手に泣かせとけばいいのよー。わざと逃げ……)

逃げようと、向きを変えるガキ。

おいおい、逃げられるとでも思つてんのかよクモ女。まさか、一つ下だからって甘く見てね？ よなあ？ なあ？ なあ！ ！ ？

「なめてたら直ぐにぶつ殺すぞクソガキイイイイイイイイイ！」

(別になめてないつづーのに・・・)

「ケツふりまきやがつて・・・テメーはクモじやなくてゴキブリだつたのかよ! だつたらそれらしくプチつと」

ブルルルル・・・・ブルルル・・・・

チツ、いいところで邪魔しやがって。

電話に出ると、絹旗だった。どうやらオレの読みが当たったらしい  
なあ・・・

「ああん? どうすればいいかあ? もう言つた通りに進めとけよ。今  
こつちはいいところなんだからよお! ——あつ、フレンダに伝言頼め  
るかあ? そうそう、伝言だよ伝言。お・し・お・き・か・く・て・  
い・だなつて伝えとけ。あばよ」

要件を伝え終わると、オレは遊びに集中する。

それにしてあるのガキちよろちよろと逃げ回るなあ・・・

そう思いながら、オレはガキの跡を追いかける。

じわじわ追いつめていくと、ガキは逃げる場所がない廊下を渡り始めた。

「はあっ・・はあっ・・しつこい男ね・・・」

「だあれがしつこいつてえ？」

「！…？グフツ…！」

腕でふさごうとしたみたいだが無駄だぜ。男の力にかなうわけねえ  
だろおが。

「それにしても、こんないかにも殺してくださいって場所に逃げや  
がつて・・・とうとう頭がいかれたかあ？それなら最後に根性出し

てレールガンの一発で撃つてくれねえかなあーー!? ギヤハハハハハ  
ハーーー！」

「ふふ・・あはは・・」

「ハハハ・・・あん?」

コイツ、なに笑つてやがる。

もしかして本当に頭がいかれちまつたのかあ? だとしたら面白くねえな。

「おいおい、いたぶる前にいかれちまつたら面白くねえぞ」

「ははは・・・そうね、今私はレールガンを一発撃つこともできないわ・・・でもね、貴方の仲間の仕掛けを作動することなら、今の私にもできるわ」

「仕掛け・・・?・・・!・!・?」

フレンダの・・・

慌ててオレは足元を見る。すると、セレブリティフレンダの仕掛けがしてあつた。

おい・・まさか・・・

「ああ、最後に言つておくわ。あなた、笑ってる方がいいわよ」

「？」

何か意味が分からぬことを言い、線に火花をつける。  
一気に足場が斬れて、落ちていく。

「くそっ・・・・！」

メルトダウナーを撃とうと考えたとき、ガキが太い、丈夫そうな線を投げてきた。

「捕まつて！！」

・・・馬鹿だなあ・・・第3位に命を助けられたのが知られたら、死ぬのよりつらいんだよ！！

オレは線を弾き飛ばし、下に落ち続ける。

だけど、オレは死ぬ気はねえ。メルトダウナーで落ちるスピードを殺すんだ！！

オレは下を向き、手からメルトダウナーを撃ち、スピードを緩める。  
しかし、これくらいじゃあ、そんなゆっくりなスピードにはならない。あとは自分で何とか着地だ。  
地面が見えたとき、オレは体制を整え、着地する。

「ゴンッ！」

「イテーーー！」

左ひざをすつた。だけど、あの高さからこれだけの傷だから奇跡だな。後は・・・オレは上に向かつてメルトダウナーを撃つ。

「降りてこいやクソガキイ！――まだ勝負はついてねえぞおおおおおお――！」

そう叫び、撃ちまくるが、足音が遠のいてくるのを聞いて、ガキが逃げたのを知る。

分かつた途端、オレはなんでガキが居たのか気になり始めた。

「クソ・・・てか、なんで「光」の世界のガキがこんなことしてんだ・・・？」

そう思い始めたとき、運よく、パソコンを持った研究者3人が通つた。

3人のうち2人は普通の体型でさっさと行つてしまつ。それにくらべて1人はデブで、歩くのが遅い。

とうとう、2人は1人を置いて先に言つてしまつた。

「これは・・・チャンスじゃん！！

「はあ・・・はあ・・・くそー組織を雇つたから大丈夫って話じゃなかつたのかよ！一まつたく役に立たな」

「止まれデブ」

「・・・？」

オレは片手でデブを後ろに投げ飛ばす。  
デブは壁にぶつかるが、そんなことどうでもこー。

「なつ・・・なんなんだよ！一お前！」

「うるせー。オレの質問だけに答へり」

「なんでお前の言ひことなんか！一ぐつ！一！」

オレは襟元を掴み、片手でデブを持ち上げる。  
いちいちつるせえデブだなあ・・・オレの質問にだけ答へりよ。オレ  
に従え。

「・・・」の研究所の実験について興味が出た。見せり

オレは伏せ田で、『トブに言ひ。

すると、『トブはなぜか少し顔を赤らめた。  
気持ち悪い・・吐き気がする。

しかし、すぐに元の顔に戻り、喋り始める。

「馬鹿こいつなーー！そんなことすればオレが殺されグフッ！！」

「今こので脂肪だらけの肉塊になるのと、残りのチャンスにかけて逃亡生活を送るのと、どっちがいいんだ？ オイ。豚よお

「ひいっ・・・ひいっ！ 分かった！ 見せるーー！」

「チツ、最初からそつぱつてればよかつたんだよ

オレは『テブを乱暴に地面に落とし、さつさとじっとせかす。』  
ついたと言い、パソコンを渡され、オレは中身を読み、口を吊り上  
げ、笑う。

「ギャハハハハツー！ なんだよ第1位様はこんなことやうされてん  
のかよー！ スライムチブチ殺してレベル6についてかあーっ笑える  
話だねえこいつやーー！」

次々に読んでいく。

おもしろいなあ・・・いつちよ、邪魔してやろうつか。

「だいたい上も何考へてんだか・・・」

そこまで言つて言葉が止まつた。

クローンはあのクソガキのクローン。そして、今クソガキは必死にこの計画を止めている。

たとえ、シリーダイヤル樹刑図の設計者が破壊されても、計画はやめない・・・。だとしたら、ガキには何もできねえなあ。自分の命を使えば止まるけど。

まつ、これなら放つておいた方が苦しみそうだな。

どうせなら、この計画が成功して、「闇」に落ちればいいのによ・・・。

「『闇』の奥深く、暗黒までな」

オレはデブにパンコンを返すと、歩き出す。

ああ、忘れていた。

後ろを向き、手をデブに向ける。

デブは慌てて逃げようとするが、遅い。

「ばいばーい。おデブさん。お前の人生はみじめな死に方で終わる」

「約束がちがうじゃないよ」

ドンッ！

「あ～ん？アハツ まさか本当にオレのこと信じてたのかよ。馬鹿  
じゃねえの？」闇の人間のこと、簡単に信じるなよ

そういう、オレはフレンダ達のもとへ向かう。

第16話 恋したことありますか？問題でも？

オレは今、フレンダにお仕置きをしている。  
アハハ、関節技つて便利だね（

アハハ、  
関節技つて便利だね～

「痛い！痛いって訳よ麦野！！」

「ん~、今日の晩御飯はどうしようかな~」

「そろそろ疲れたからやめる」

ゴキツ

「ふー！」

オレに首をゴツキンやられたフレンダは真っ白になつて床にパタンと倒れる。

結局、あの後帰ってきたオレは冷蔵庫に何もなかつたことを思い出

し、適当に買つてアイテム全員が生活してゐる家に帰つてきた。

そして、冷蔵庫に食材を入れた後、フレンダのお仕置きタイムが始まつたわけだ。

・・・とりあえず晩御飯のメニューを考えないとな・・・

「よーし。お前らは何が食いたいんだ?」

「こうなつたら最後の手段、皆から意見を聞いて作る。ここで問題なのは意見がバラバラになることだ。まあ、今はフレンダが居ないから意見は二つしか出ないけどな。

「今、超カレーが食べたいです」

「私はハヤシライスがいいな」

「見事に別れたねお前ら一人。じゃあしようがない。今日はシャケにしよう。明日はカレー、あさつてはハヤシライスだな」

なんだか急にシャケの塩焼きが食いたくなつてきた。  
もう意見とかどうでもいいや。

すると、絹旗が思つた通り文句を言つてきた。

「ちよつ！…意見を超無視してゐるじゃないですか！！」

「いいんだよ！オレに指図すんじゃねえよ！飯作つてんのオレだか

「うおーが決めるー文句があるなら食つさじやねえーー。」

「私、もうなんでもいいから食べたい。おなかすいた」

「見ろーー絹旗！滝壺を見つけ。何も文句いわないだろ」

「いや、ただ超違ひでもよくなつたからですよ」

「・・・同じだ」

「超違います」

「ええい！五月蠅いやつめーーこつなつたら絹旗のシャケに塩たっぷりふってマコネーズとからしかけてやるーー」

「あー、何か変もの入れたりかけたりしないでくださいよ」

「チツ」

見抜かれてた。

( ( やうやく、毎回毎回してたらぬ ) )

フレンダをたき起にして晩御飯の手伝いをさせる。服は汚れたら嫌だからエプロンは必ずつけてる。

「氣のせいだろ」

「結局、私の扱いが酷いって訳よ」

「うひうひ～・・痛いって訳よ・・・」

「うむむむ。いつも役に立たないんだから今役に立て

そういうや、最初、フレンダ達の前でエプロンつけたとき、なぜか滝壺以外は頬を赤くしてたな・・・オレ、なんかしたか？

「麦野……」さういふ訳よ……。」

余計なことを考えてたら少ししゃけが焦げた。すまない、シャケ。  
この焦げたのはフレンダに食わせそう。

「麦野」

「ん?なんだ?」

オレはさらにシャケやサラダを盛り付けながら返事をする。  
また変なこと言い出すのか？

そしたら、予想を超えた質問をしてきた。

「麦野つてさ。恋とか付き合つたことがあるの?」

「…………ぶふおつ……！」

オレは口に入つてたお茶を吹き出した。  
からうじて顔の方向を変えたから飯にはかからなかつた。  
それよりも・・・いきなりなんつーこというんだフレンダ。あまり  
のことに吹き出したじゃねえか。

「やつぱり麦野ほどの人だからあるよね？」

「・・・・」

「・・・・麦野？」

そんなフレンダの声などオレの頭に入つてくるわけなかつた。

俺って、恋したことってあるもんっけ？

いや、待て待て、一回くらいはあるはずだ！よく思い出せ……！  
オレは必死に記憶をほじくりだす。だけど、出てこない。  
覚えがあるのは、「あつ、あの人綺麗だな」くらいしか出てこない。  
・・・オレ、青春時代に何してたんだよ。暴れまくってただけじゃねえか。

「まさか麦野……恋したことないの……？」

「……うん、そうだね。さて、フレンダの『飯はなしか』

「なんでそうなるって訳よ！？」「

なんで？オレが鈍感なの？それともただ馬鹿だったから？えつ？えつ？えつ？

オレの頭の中は恋のことについてでいっぱいになる。  
その間に3人が話していたことを聞いていなかつた。

「麦野、恋したことないらしいって訳よ！」

「超チャンスですね。私は麦野の初めての恋人になつてそのまま結

婚です」

「いやいや、それはないわね。結局、麦野は私のところへ訳よー。」

「二人とも、がんばってね」

オレはただ必死に考える。

「恋恋恋恋恋・・・相手を好きになるってどうしてだ?ん??.?  
??.?」

胸がドキドキする?、ドキドキ?、なにそれ(笑)  
てか、オレ恋とかそういうの興味ないんですけど(笑)  
誰だ?、鈍感リア充つて言ったの。

## 第17話 なんぞみれるんだよー！

後日、絹旗が変なDVD持ってきた。

「恋愛したことがない麦野にも、これを見れば超一発で恋愛がビリつ  
いつことか分かりますよ」

「？・絹旗たちはあるのか？」

オレがそりこりと、横からフレンダが入り込んで、ない胸をは  
る。

「私はあるよーーの脚線美に惚れた男が『ひじや』『ひじや』と・・・」

「まあ、つまりは、足に惚れただけで顔とか性格で惚れたわけじゃ  
ないって訳だな」

「ひじやって訳よーー！」

「オレ、思ったことそのまま口であまうんだよ。悪氣はな・・あ

る。」

「 ものの……？」

フレンダが涙目でオレの肩を掴み、がくがくと揺らしてくる。やめろ、酔う、吐く！

「 線旗はあるの？」

「ええ、もちろんありますよー。5回付き合いました。それに、私は映画やDVDで見ていますから恋愛がどういうものか超分かつてますよー。」

フレンダに比べてはあるが、それでもない胸を張る。

「二人ともアイテムの中じゃ、貧乳担当だな」

つい、本音がぽろっとでた。すると、その言葉を聞いた二人は落ち込んだ、が、すぐに復活した。

いつも言つてるからな・・・これぐらいじゅう気にしなくなつてきたのか・・・

そう思つてゐるひし元、緑旗がDVDを見る準備をし始めた。仕方がない、正直、恋愛がどうこうものかさっぱり分からないのでみといつ。

「滝壺一。飲み物入れにいくぞ」

「うん。二人は何がいい?」

「私は「一ラで」

「私はサバか「飲み物だつて言つてんだろ絶壁・つるべた小娘」・  
・じゃあメロン・・」

滝壺とオレがキッチンへ向かい、飲み物を入れ始める。

おかわりもできるように入れものに入れて、それも持つて行つてフ  
カフカのソファに座る。

準備OKなのを確認すると、絹旗は再生ボタンを押した。

最初は映画の宣伝が長い間流れた。それでも、早送りはしない。も  
しかしたら宣伝の中にいい映画の宣伝があるかもしれないからだ。  
そう考えながら、「ップに口をつけ、中に入っている「一ヒーを飲  
んでいく。

暫くして、やつと映画が始まる合図になつた。そう思いながらもオ  
レは「一ヒーを飲み続ける。

ふと、足元に落ちていたDVDの入れ物を見つけ、どんな恋愛物語  
なのか説明を読もうとした、だけど、ある文字により、オレの動き  
は止まつた。

「・・・え?」

『18禁』

その時、Hロッぽい声がテレビから聞こえてきた。オレはそろそろと画面に向ける。

すると、画面には裸の女の体を、同じく裸の男が触っている映像・・・

その映像を見た瞬間、オレは顔が熱くなり、とつとて叫んだ。

ガニツバシヤツバキイツバサツ

「～～～！！ちよつ・・・耳元でなんて超大声だしてるん・・・です・・か・・・？」

「む・・・麦野・・・？」

「大丈夫？耳真っ赤だよ？」

「なつななななつなんでお前らはそんな普通でいるんだよ！…！ありえねえ！…！ありえねえだろ！…！」

クッショーンで顔ををかくして画面を見ない様にしながらそう叫ぶ。あーーーーー！なんだよはじめから！…なんだよ今の！…？なんだよお前ら！…！8禁のやつを1-8歳じゃないお前らがなんで普通に見れているんだよ！…おかしいだろ！…！

顔が熱い！…絶対今のオレ、顔も耳も真っ赤だぞ！…心臓もバクバクする！…！

そんなオレを見て、3人は分かったのだろう。オレが初心なことに。

} } } 3人称 } }

3人は衝撃を受けていた。

( ( ( 麦野は ( 超 ) 純粋だ ! ! ) ) )

そう分かると、絹旗とフレンダは喜ぶ。

（（そだつたら・・・私が麦野と（超）初めてになれる・・・！））

「？」

麦野のことを綺麗だと思いながらも仲間以上、恋人未満にしか思つていらない滝壺は頬を染めている一人をみて不思議に思つていた。

そんな滝壺をほつといて、二人は興奮しはじめる。

その間にも、麦野は赤い顔をかくして、普通に見ていた3人に向けてまだブツブツ文句をいつていた。

## 第1-8話 無事でいれるとおもつなよ

結局、麦野は少ししかみず、クッショングで顔をかくしていた。その反応を見て、フレンダと絹旗はにやにやする。滝壺はいつの間にか寝ていた。

「麦野つて純粋なんだねー まあ結局、それもツボに入るけどね」

「うう・・・ん? なんのツボにだ? てかどうやって純粋をツボに入れるんだよ」

「え! ? あつ・・あつあへ・・・『気にしないで今のは! ! 結局、ただの言葉の間違いつて訳よ! -』

必死に「まかす。普通なら怪しまれて問い合わせられたりするのだが、今の麦野にはそんな余裕がなかつた。なぜなら、視界にテレビが入つたからである。またもや顔を真っ赤にして顔をかくす。フレンダはそれを見て顔をにやけさせる。

(麦野、超可愛いって訳よ! ああ・・・これが私の彼氏?)

(何言つてゐんですか! ? 私ですよー寝言にしては田が開きすぎですし呆れますね)

(ちょっと! 酷いって訳よ! ! まつ、結局は私にとらわれのを恐れて言つてるんでしょ? 分かつてるんだから! )

(だから寝ては面白ことを通じて馬鹿だったりかかるで  
すよ)

(なつ……なんだと…………? 縄旗のへせ…………)

(わざわざなんです・フレンダのへせ…………おせんせ  
くださり……)

(望むと…………)

お互に、一歩も譲らざる外に飛び出る。音で麦野に見つかってはい  
けないので、一人だけで戦つても聞こえないところまで移動する。  
それを、寝ぼけながら滝壺は見ていたが、すぐに夢の中に入ってい  
った。

「準備はいいかしら？私は準備OKよ」

「いっちは超OKですよ」

二人は能力は使わない喧嘩にすることにした。  
しかし、二人の喧嘩の条件は殴る蹴る投げ飛ばすなどがOKの不良  
の喧嘩だ。当然、顔面だつて有りなのだ。

「じゃあ、数えるよ。一、二、三……」

三で一人は地面をけり、とびかかる。

そこからはすぐかつた。腹を蹴る、顔面を殴る、とび蹴りをくらわ  
す。直ぐに一人の体にはあざやこぶ、血などがついてくる。  
それでも、降参などと言わない、負けるのはどちらが気絶した時な  
のだ。

長い間、一人は勝負をする。

そんな時、裏路地から出てきた青年に、絹旗にくらわそうとして出

したフレンダの拳が、青年の顔にめり込んだ。

「ドゴッ

「ぐふっ・・・テメー・・・」

「「あつ」」

二人は動きを止める。青年の口は斬れ、血が出ていた。  
そして、次の瞬間、少年の背中からは翼が生えた。

「なつ・・・」

「能力者！？？」

恐怖のあまり、動けない一人。そんな一人に青年はじりじりと近寄る。

「オレを殴るとはいひ度胸じゃねえか・・・ムカついた。殺す」

「ひつ・・・ゲフッ！？」

思いつきり腹をけられ、フレンダは壁にぶつかる。

直ぐに縄旗が助けようと近づいたが、顔面に向かって、何か装具が付いた拳が飛んできた。

能力を使って防ごうとしたが、顔面に強烈な痛みが走り、飛ばされる。

「なんだあ？お前、皮膚を固くする能力者か？まあ、オレの前じゃあ意味ねえどな！！」

青年はフレンダと縄旗に向かって能力で作り出した鉄骨を投げた。

「麦野。たいへんだよ麦野」

「うん？」

まだ顔を少し赤くしたまま、麦野は返事をした。まだ気づいていないらしい。

「フレンダと絹旗がピンチだよ」

「……？」

立ち上がり、ドアに手を開ける。  
それを見た滝壺はあるものを取り出す。

「麦野。正体がばれたらいけないから。これ」

「滝壺・・・・・もつとましなのないの？」

感動しけけ、渡されたものを見て、涙が引っ込んだ。  
渡されたのはカーニバルにつけそうな派手な仮面だった。  
「なんでこんなもんもってんだ?」そう思つたが、ふざけている暇はないので、それを付けた。

「行くぞ！！」

「うん、任せて」

二人は走り出す。

一方、フレンダと絹旗は作り出された鉄骨を体の近くに動けないに刺され、動けないでいた。  
青年はまだイラつきが收まらないのか、次は何をしようかと考えていた。

「うひ、まだ傷口がひずむやがる……ムカツクなあ……せひせつて殺してやうつか」

「へうへ……」

「ああ、うつだ。頭を翻つてやうつか。おもしろいやうだな」

そうこう、手を近づける。死を覚悟して、フレンダは皿を開じた。

(「あんな・・麦野・・・…。)

悪魔の手が後少しで自分の頭に触れる、うつ思つた時、皿の前が明るくなつた。

(え?)

いきなり口が昇つたなんてことはありえない。フレンダはおかるおそる皿を開けた。すると、皿の前には恋をしてくる、頼れるリーダーがいた。

「テメー・・・オレの仲間に手ぇだして無事でいらっしゃると匪つなよ・・・」

そういう麦野の田は、怒りで燃えていた。

## 第1-9話 オレを先に殺せ（前書き）

作者は「」から原作を知らないのです。

なので、「」からは原作とは全然違う話になります。

小説を読むのがなんかワシになると思つたなー

## 第19話 オレを先に殺せ

直ぐにオレは、茶髪の男に向かつてメルトダウナーを撃つ。だけど、背中から生えた天使のような6枚の翼で塞がれた。なんだよ、あの翼・・・

「へえ、なかなかの威力だなあ」

男は余裕そうに言つ。

少しオレはムカツとする。余裕莊に言いやがつて・・・  
だけど、まだ本気で撃つたわけじやねえが・・・メルトダウナーを  
防ぐとはな・・・同じ超能力者か？

そんなことを思つていると、相手も同じことを思つていたらしい。

「IJの威力。レベル4じゃ到底無理だな。お前、超能力者だろ」

「・・・そうだ。そつちもだろ？超能力者の能力を防げるのなんて、  
同じ超能力者しかいないからな」

「同じ・・・はははっ！！」

敵が笑う。なんだよ、間違っちゃいないはずだ。それとも、超能力者の中でも圧倒的な力をもってんのか？だとしたら……

オレの頭に、レベル5たちの能力が頭に浮かんだ。

レベル5の中でも圧倒的な力をもってんのは・・・まさか・・・

「そうだな。同じレベル5だけど、力は全然違う。オレは第2位、  
ダーツマスター未元物質。かきね垣根ていとく帝督ていそくつづうんだ。死ぬまで覚えてろよ。まあ、つ  
つても、直ぐに死ぬけどな」

「つづーーー！」

翼つばさがさつきまでオレが居た場所を抉り取る。

おいおい・・・マジかよ、第2位とか・・・こんなの、あの方法し  
か勝ち目がひとつかけらもねえじゃねえか！  
くそつ、先にフレンダと絹旗をどうにかしねえとーー

「オイ！滝！！金髪とチビをどつか遠くまで連れてけーーー！」

「むふ・・・分かった」

オレの言葉で氣づいた滝壺は、名前を呼ぶのを途中でやめる。  
もしコイツの仲間が近くにいて、俺たちの名前を聞いてアイテムだ

つてことが分かれば・・・絶対に後で襲撃にくる。たとえその襲撃を防いでも、追い掛け回してくるだろ。そうなれば、俺たちは死ぬまで逃亡生活をおくらないといけない。

（なんことは駄目だ。まだフレンダ達にはやりたいことだつてたくさんある）

自分を犠牲にしてでもコイツを殺さないといけない。

長期戦になればオレが圧倒的に不利だ。だつたら・・・

（・・・使うしかねえか・・・あの方法・・・メルトダウナーの最大出力を・・・）

オレはあのクソ神のことと言われたことを思い出す。

アイツはずつと前、これで会うのは最後だと言つたとき、間違えて殺した償いとして、本来なら、体や腕が吹き飛ぶほどの出力を出しても、大丈夫なようにするつて言つていた。

それは検査しても分からねエものらしく、研究者どもも最大出力をすれば体が吹き飛ぶつて言つてやがった。

今まで恐くて安全内から出たことはねえが・・・仲間を助けるためだ。最大出力でこいつを吹き飛ばす！

オレは手を垣根に向ける。

垣根はまたさつきと同じメルトダウナーだと思つたのか、笑う。

「はつ！お前、超能力者のくせに頭悪いな！－そんなものいくらオレに撃つても無駄なんだよ！－！」

「そんなこと分かってるぜ···だから変えたんだよ···」

「何をだ？さつきと変わらねえじやねえか···？」

やつと気づいたようだな。そう思いながらもオレはいつもより複雑な演算をする。

恐い···自分が死んじまうかもしれないことが恐い。けど、仲間が全員死ぬより···オレ一人が死んだ方がましだ！－

決意し、吹き飛ばされない様にオレは足に力を入れる。

「嘘だろ···！？こんなのが撃つたら体が吹き飛んじまうぞ！－テメエ、死ぬ気か！－？」

「うるせえ！－」

「···？」「

垣根は目を見開いてオレを見る。

「仲間のために···リーダーが体を張るのは当然じゃねえか···」「こいつらを逃がせるんなら、死んだってかまわねえんだよ」

「・・・麦野・・・」

滝壺が鉄骨を取り除いてる間、ぽつりとフレンダがオレの名前を言う。

その名前を聞いて、垣根はようやくオレが誰なのか気づいたようだ。

「麦野・・・？仮面野郎、お前、第4位か！」

「死ぬ前に分かつてよかつたなあ！！ブチコロシ確定だクソ野郎！」

！』

オレは最大出力のメルトダウナーを放つ。予想をはるかに超えた威力で、オレの視界はメルトダウナーで見えなくなる。体は痛くもねえ、ただ、吹き飛ばされそうになる。それでも、必死にふんばる。

実際は10秒間だけだったが、オレには長い時間に思えた。踏ん張つたせいで足が震える。

やべえ・・・立つてられねえ・・・

オレはその場で膝をつき、汗を流す。

この汗は恐怖の汗だろ？。次に撃つときは踏ん張つたせいでの汗になつて、流す量もすこしになつてているはずだ。

「あの・・・野郎は・・・？」

死んだ? そうだつたらいいのにな。  
期待しながら顔をあげる。しかし  
し、期待は裏切られた。

垣根は、オレから見て左側の翼が、オレのメルトダウナーで消えただけで、無傷だった。

「・・・すげー威力だな・・・けど、残念だったな。オレには当たらなかつた。今のお前の状態を見れば、もうお前は動けないだろ?」

「」

その通りだ・・・もうオレは動けねえ・・・  
垣根が余裕そうにオレに歩いて近づいてくる。チクショウ・・・ム  
力つくんだよ・・・その余裕が!!

「余裕そうにオレの相手をするのが・・・ムカつくんだよ・・・気にくわねえんだよーー」

「ああ？ だつたらそれはお前に殺されたやつらも思つてたはずだぜ？ なんせお前は歩きながら撃つだけだ。さぞムカついただろ？ な」

普通のメルトダウナーを撃ちまくる。だけど、そんなの垣根の翼で塞がれる。無駄な抵抗だ。

「オレのことムカついてんだろ？安心しろ、オレも第4位のお前程度に翼を消し飛ばされたのにムカついてるから……なあ……」

「がつ……」

「麦野……」

腹を思いつきり蹴られ、いろいろなものにぶつかりながら壁にぶつかる。吐きそうになつたが必死に耐える。そんな状態の時に、またもや腹をけられ、違う壁まで吹っ飛び、オレは地面にうつぶせになる。

壁にぶつかるまでにいろんなものにぶつかつたため、滝壺が渡してきた仮面は壊れてとれた。

「麦野……もうやめてっ……麦野だけ助けて……」

「駄目なら……せめて私たちを超先に……」

「そういうわれたら、先にこっちを先に殺したくなるな

「麦野……やめて……」

「つるせえな……望み通り先に殺してから、コイツをじっくりいたぶつてやるよ」

そう聞き、身構える3人。時間を稼ごうとしているみたいだ。

だけど、オレより先に3人が死ぬのなんて許さない・・・オレを殺してからにしろよクソ野郎！！3人が殺される姿を想像して、オレは涙を流す。そして、悲鳴を上げる体に鞭をうち、立ち上がり、メルトダウナーを撃つ。

「あっ？動けたのかよ。しぶとい野郎だ」

そういう、残った翼で防ぐ。垣根の視界が翼で隠れた瞬間、オレは垣根の腹に突っ込んだ。

来るのは思っていなかつたのだろう、翼で防げず、垣根は地面に倒れる。

当然、上半身を起こし垣根は動けず、自分の腰にいるオレに怒り、フレンダ達の首に翼を当てる。

フレンダ達は恐怖で動けなくなる。

「・・・！クソがあ！・・・」いつらを殺されたくないんだつたら動くんじゃねえ！！

「・・・ブ・・・チコロシ・・・確定だつ・・・つったろ・・・聞こえてなかつた・・・のかよ・・・第2位・・・」

垣根を睨もうと、オレは必死に顔をあげる。そう強気でいつても、もうオレにはメルトダウナーを一発撃つことすらできない。垣根は怒鳴る。

「ああ！？馬鹿にしてやがんの……か……う……」

「……？」

オレの顔を見て、垣根の声は小さくなり、消えた。今のうちにコマイから離れようと体に力をいれるが、体が持ち上がりない。

フレンダ達が逃げてとか言つてやがるが……もう無理みたいだな・

諦めて顔を下げようとしたとき、オレは肩を掴まれ、押され、垣根の足の中で、女のように正座を崩した恰好になつた。

その恰好のまま、垣根は長ことオレの顔を見ていた。

なつ、なんだ？怒りすぎて頭おかしくなつたのか？

そんなふざけたことを思つてると、垣根が突然「うん」と、首を縦にふり、思いもしなかつた言葉を言つた。

「オレ、お前に惚れた」

「…………はあ！？」

フレンダ達とオレの声が見事に重なつた。

当然、オレは混乱して何がなんだか分からなくなる。

第2位は本当に頭がおかしくなつたようだ。



## 第20話 本当に病院行かなくていいのか？

垣根以外の俺たちはピタッと動きを止める。

暫くしてようやく出てきた言葉はとても震えていた。

「・・・ん？空耳？空耳か？それとも幻聴か？え？」

第2位がオレに惚れたって・・・嘘だろ？嘘だろ？嘘だよな？なあ？  
だいたい、コイツオレのこと女つて思つてないだろ？いや、そ  
れはないか。さっきの戦いで大分服がボロボロだし。まあ、一応聞  
いておくか・・・もし女だつて言つたら殺そう。オレ気にしてんだ  
ぞ。

「おい、聞いてんのか？」

「えつ・・・ああ・・・お前、それ本気か？オレは男だぞ？」

「？本気だし男つて」とぐらりと分かつてゐるぜ。オレのことなめてん  
のか」

「こいつ……本気だ！！早く病院行かないといけないんじゃないのか……？」

「……敵にこんなこというのは変かもしだねえが……病院行くか？」

「すんごい傷ついた」

その言葉を聞いて、オレはマジで本気だとわかる。だけど……認めたくないねえ！！！オレは同性愛なんで興味ねえしされたくもねえ！！

てか、こいつホントに病院連れて行かなくていいの!? 頭大丈夫かよ！？

失礼なこと考えてると、フレンダ達が垣根からオレを引き離した。  
Niceだ！お前たち！

正直、オレは先ほどの戦いのせいで体が動かせない。フレンダ達はコイツから引き離さなかつたらオレはずっとコイツの足の中に座ることになつてた。

「麦野。超大丈夫ですか！？」

「血まみれだよ……」

心配そうにオレの体を気遣ってくれる綱旗と滝壺。いつもは変なことばっかりする奴だとおもうてたけど……いいやつじゃねえか！

あつ、目から水が出てきやう。

しかし、フレンダは違つことを考えて顔を暗くしていた。

「・・・フレンダ。どうしたんだ？」

「麦野・・・私・・・私・・・って・・・駄目だね・・・うう・・・ぐすっ・・・」

「！――何で泣くんだ！？オレなんかした！？」

オレの顔恐がつた？そんなこと考えたけど、フレンダは違つことを考えていたみたいだ。

「違うの・・・だって・・・私が喧嘩したりしなかつたら・・・麦野は傷つかなかつたのに・・・結局・・・全部私のせいって訳よ・・・」

・

それを見て、一緒に喧嘩をした綱旗も顔を暗くする。

それを見てオレは大げさにため息をつく。おいおい、せつかく生きてんのに、そんなことどうでもいいじゃねえか。

オレは一人の頭をくしゃくしゃとなれる。当然、二人は涙を流しながら驚く。

「馬鹿だな。お前ら。オレは生きてんだから、もうどうでもいいだろ？それにな、一人が悲しんでる姿を見る方がオレにはつらい。だからほりつ、さつさと涙止めて帰ろうぜ（頭おかしい人はおいて）」

「麦野・・・うん」

「あれ？オレのこと無視してない？おい、おーい」

何も聞こえない。幻聴だ。

二人は涙をふき、強い目になる。よしつ、大丈夫だな。

「さーて、行こうか」

そういう、オレは立ち上がるうと足に力を入れる、しかし、さつきも言ったように、先ほどの戦いのせいで動くことはできない、立ち上がる力も残っていない。体中の傷も痛い。

かといって、ここから家まで結構距離がある・・・年端のいかない女のフレンダ達が男のオレを家まで運ぶのはきついだろうし・・・どうしようか・・・

そんなことを考えてると、ふわっと体を持ち上げられた。体中にいた傷に触れられ、激痛が走り、オレは涙目になる。すると、オレを持ち上げたやつが口を開いた。

「おっ、涙目」

「・・・えつ？・・・／＼／＼！？」

持ち上げた奴の顔をみて、オレは固まり、そして顔を赤らめる。

当然、皆も分かっているだろうが、今、オレを持ち上げたのは先ほど爆弾発言をした垣根だ。

当然、オレは混乱する。混乱し過ぎて実況が出来なので実況を変わらうと思う。パス！

はいはーい

（三人称）

麦野は先ほどまで敵だつた垣根にお姫様抱っこされでござることが分かり、焦る。

「『ぱつーおひせ』ボケア！何女みたいにオレを持つてんだボケエ！…」

恥ずかしい恰好をやめさせようと、暴言を浴びせる。第2位に抱っこされるのは屈辱だったし、なにより、彼の中では、お姫様抱っこは女子だけにするものだと思っていた。なので、自分がそれをされ、女扱いされているのが恥ずかしかった。しかし、垣根は全然離さない。

赤くなつている麦野を見てにやにやと笑つている。その笑顔を見て、麦野の頭の中で、垣根＝変態という方程式が立つた。

そんなことをしている間にも暴言を言こまくつたのだが、垣根は無視をする。

「はつはつはつ、きかねえなあ」

「麦野を汚さないでくれませんか。超汚らわしいです」

「げふつ！！」

笑っていた垣根にタックルを食らわせ、麦野を奪い返す。  
まだ赤い顔のままの麦野を心配して滝壺が優しく声をかけている。

「大丈夫？」  
麦野

「だつ・・・大丈夫、じゃねえよ・・・」

「大丈夫、私はそんな麦野を応援してる」

「応援する前にアイツをどうにかしろーー！」

「大丈夫、フレンダと絹旗がどうにかしてくれから」

「そうそつ、任せて麦野」

黒い笑顔で垣根に近寄っていく。しかし、垣根はするりとフレンダ  
から逃げ、またもや麦野をお姫様だっこし、翼をはやし、空を飛び、  
どこかに向かい始めた。

下でフレンダ達が何か言っているが、直ぐに聞こえなくなってしまった。

もう何を言つても駄目だと分かった麦野は、諦めてどこに行くのか

尋ねる。

「……ビニに行くんだよ。オレをじつくりなぶり殺そうってのか？」

「まだ信用してなかつたのかよ。だから言つたら？お前に惚れたつて」

「……本当にびょういん」「いらぬ」……

本当かよ、といしつこく本当にコイツ大丈夫か？と思つていたが、垣根が不意にこっちを見たので、考えるのをやめた。

ジロジロと麦野を見て、垣根は笑う。

「でもまあ、お前は病院が居るみたいだけどな」

その言葉を聞いて、麦野はむつとする。  
この傷は先ほど今、自分を抱えて飛んでいるこの第2位が付けたものだ。自分は関係なによつて言つられて腹を立てる。

「誰のせいだと思つてんだクソ野郎」

「オレのせい」

普通に答えた垣根を殴つうとするが、オレを殴つたら落ちて死ぬぞ。と言わされたのでし、ぶしづ手をひつこめた。

「安心しろ。あり得ないほど腕のいい医者がいるんだ。そいつならお前の傷を痕も残さずに治せる」

「化け物みたいな腕だな。本当に人間かよ」

「顔はカエルにってる」

「ああそうかい」

そこで麦野は喋るのをやめる。病院につくまでじつにじつに垣根が話しかけてきたが、無視した。  
そして、凄腕の医者がいる病院につき、その医者に会い。問答無用で手術室に放り込まれた。

## 第21話 クソメルヘンは帰れ！！

「…………」

真っ白い部屋の中でオレは田を覚ました。

全身がズキズキ痛む。何で怪我なんかしてんだ……？

(ああ、やうか昨日……)

第2位と戦つたんだつた。そのあと、アイツに病院に連れてこられ  
て……問答無用で手術室に放り込まれて……  
そこまで思い出して、フレンダ達はどうしたのか気になる。

(あの後……どうしたんだ……？アイツら……まあ、この傷じ

やあ探しに行けないけどな）

探すのは諦めて、寝返りをうつ。すると、田の前にフレンダの顔があつた。

ピタリと、音がつくかと思うほど動きを止め、フレンダを見る。暫く見た後、ほかも見ると、滝壺は椅子に座って寝ており、絹旗はフレンダに抱き着いて寝ていた。

（あの後、ここまで来たのか・・・結構距離があつたのにな・・・）

それでも、来てくれたのか・・・ありがとな、3人共。  
怪我が治つたらなんかおじつてやるよ。

そう思つた時、腰に違和感を覚えた。

何かがオレの腰に巻きついてる。なんでだ？仲間は3人しかいなかつたよな？といふことは・・・  
おそるおそる腰を見る。すると、思つた通り、あの変態がオレの腰に抱き着いて寝ていた。

「・・・はは」

メキッ（殴った）ガスッ（蹴った）バキイッ（顔面ストレートパン

チ

ぽいつ（廊下に音が捨てた音）

「……………！」（体が痛くて叫ぶの我慢してる）

オレ、垣根 帝督。学園都市に7人しかいない超能力者のなかの第2位。残念ながら1位は白モヤシだ。

そんなオレは、恋をした。昨日、オレの顔面を殴つてきやがつたガキが居やがつたから遊び殺そうとしてたら変な仮面をつけた男が出てきた。オレを殴つたガキどものリーダーらしい。

能力の威力を見て、超能力者だとは分かつたが、同じレベル5でもオレの足元にもおよばねえ。

そう思つてたら、野郎は自分の体が吹き飛ぶかもしけねえのに全力の「原子崩し」<sup>メルトダウナー</sup>を撃つてきた。

正直焦つたが、片方の翼が無くなつただけだつた。それでも、許せなかつた。三下に翼を吹き飛ばされたなんて・・・ムカついた。ぶち殺す。そう思つた。

第4位は大技を使つたせいでもう動けなくなり、普通のメルトダウナーしか出せなくなつていた。

だが、そんなもの、オレにはきかない。ムカついた第4位の腹を2回蹴つた。

すると、やつの仲間がギャー・ギャー騒ぎ始めた。五月蠅いのでオレは先に雑魚を殺そつとした。

そう思つたその時、第4位がオレの腹にツッコんできた。勢いでオレはこける。当然、オレの怒りが頂点になる。本当に殺してやろうと、やつの顔を見た。

だが、第4位の顔を見て、オレは動きを止めた。

第4位に恋をした瞬間だった。

そうだな・・・あの時、オレの田には麦野が輝いて映った。  
あの折れてしまいそうな細い体。痛みで涙を流し、田をうるうるさせ、オレの足の中で、その目で上目使い。

これで惚れない奴はこの世にいないだろ！絶対にいなーって！

そのあと、なんやかんやありながら、怪我を治すためにこの病院に連れてきて、一緒に寝てたんだが・・・寝ているときに一きなりフルボツコにされた。なんでだ？ オレ、何かしたか？

そのあと、廊下でそのまま放り出され、カギをかけられてしまった。

・・・廊下寒・・・

何とかして中に入れてもうおひ。

「おーい。オレも入れてくれよー」

「黙れ変態！ 消えろ変態！ 息泊めて死ねクソ変態野郎！……！」

「……」

こへりなんでもそれはオレでも傷つくなー！ うなづか、カヅくだー！

オレはドアノブに手をかけ、ドアを壊そつとこぼじめる。流石に病院で能力は使えない。

「開ける~~~~ドア壊す~~~」

「誰が開けるか~~ドアを壊そつとすんな変態~~~」

「なんでオレが変態なんだ~~?」

「同性に恋した時点で変態だ~~!」

「世の中にはそんな奴はたくさんいる~~だからオレは変態じゃない~~!」

「だからて初めて会つたやつの腰に抱きつくなつがどこにここんだ~~!」

「お前はここにいる~~!」

「はづる~~!」

「剥げないぞ~~! 剥げたら頭が光るじゃねえか~~!」

「光つちまえ~~!」

怒鳴っている間にもドアを壊そつと蹴つたり殴つたりする。がつ、全然壊れない。

丈夫だなこの野郎~~~

てか、本当にビリしそうか。このままじゃずっと廊下にこもるか帰るしかないし……最終手段を使うか。

オレはドアノブから手を話し、廊下を歩き始める。

「・・・行つたか・・・」

変態の足音が遠のいていくのを確認し、オレは安心する。  
やれやれ、やつと静かにできる。

「麦野、大丈夫ですか？全身傷だらけなんですから、超安静にしておいたほうがいいんじゃないですか？」

「ああ、安静にしようと思つたら変態が居たんだよ」

「大丈夫、私は変態に付きまとわれる麦野を応援してやる」

「助けようか滝壺」

「あ～、そろそろ任務の時間だ。・・・麦野。どうしたらいい？」

「あ～、そういうや、今週は仕事がたつぱりあるんだよな～、こんな時に限つて・・・チクショウ。まあ、仕方ねえ。今日は3人に頑張つてもらおうか。

「オレの傷が治るまで、3人でがんばってくれ」

「うん！分かつたって訳よ！結局、この傷は働きづめの麦野を休ませるのにちょうどいいって訳よ」

3人はそれぞれ言い残して帰つていく。

さて・・・寝るか・・・さつきの変態のせいで疲れたしな。ベットの毛布を整え、寝ようとすると。そんな時、窓が開いた。

ポーズを決めて入ってきたメルヘンの顔に、すごい速さでオレの投げた椅子がぶつかった。



麦野 沈鳴（むぎの しづなり）

麦野 沈鳴（むぎの しづなり）

性別：男性

所属：長点上機学園

年齢：高1 16歳

身長：179センチ

能力：学園都市第4位の原子崩し（メルトダウナー）——超能力者（レベル5）

容姿

モデル以上の美形で、男女問わずに一眼ぼれされる。

引き締まっており、肩幅も男子にしては狭く、体も細い。それと顔のせいで、声も女にも男にも聞こえる中性的な声なので、よく女に間違われる。（本人は女に間違われるのを嫌っている）

前に、フレンダに「色白で細くて女子みたいだね」と言わられてから何とかしようと思っているのだが、太りにくく、また、すぐに痩せてしまうため、毎日、体重を増やそうと頑張っている。

短髪で、本来の麦野と同じく茶色の髪。

服はシンプルかつ、カツコイイ系が多いが、あまりオシャレに興味が無いので、数は少ない。

## 性格

普段は面倒見がよく、とても仲間思い。

いつもはフレンダを虜めでは楽しんでいる。

しかし、少々ワガママで、自分がしたくないことは絶対にせず、自分がしたいことはなんとしてでもやる。そんな時は仲間を振り回しまくる。

また、麦野と同じく、完璧にやらないと納得せず、パーフェクトになるまでやり続ける。

自分を犠牲にしてでも仲間を助けようとする優しさがあるが、反対に、仲間が幸せならそれでよく、ほかの人はただの使える道具とかしかみていない。

そのため、敵には情けをかけず、敵の反応が面白いため、絶望に落としつれてからじわじわ殺していくなど、残酷で冷酷な一面を持つ。

とても純粋で、恋をしたことがなく、「恋」というものがよく分からぬ。

18禁のビデオ見たときも、顔を真っ赤にして必死に顔をかくすなどをした。

また、フレンダと縄旗が自分に惚れているのをまったく知らないな

ど、鈍感でもある。

鍛えているので、能力が使えなくても不良を圧倒でき、身体能力も跳びぬけて高い。

不真面目で、学校も、最初はいつていたが、簡単すぎてつまらなくなり、途中から行つていない。

-----

元は、上位の神様のミスによって死んでしまった青年が転生した姿。前世は不良で。毎日喧嘩をしていた。

そんな時、遊んでいた神様がミスつてしまつたため、死んでしまつた。

上位の神様にすら暴言を吐き散らすという凶暴な性格だったが、今は少し丸くなつてゐる。

今は、自分に惚れてしまつた垣根をどうじよつか真剣に考え中。垣根には遠慮なく、顔面を殴つたり、椅子を投げたりなど、不良の時の性格があらわれている。



## 第22話 オレ！死にます！

「…………む…………むぎ…………の…………？」

「…………だつ…………大丈夫…………じゃないですね…………」

「むぎの、生きてる？」

仕事を終え、ドアを開け、部屋に入った3人の目線の先には、ベッドの上で手足を体の横にだらんと投げだし、寝そべつたまま動かない麦野がいた。

生きているのか心配になつたが、呼吸をする音があるので生きていることが分かつた。

だが、まっすぐになつたまま——も動かない。心配になり、少しずつ3人は近づいていく。もちろん、フレンダが先頭だ。

「麦野…………どうしたの…………？」

麦野の体を突つつきながら問う。しかし、返事は帰つてこない。もしかして寝ているのかと思い、顔を見ようとすると、枕にうずもれていて見えない。しかし、このままにしておけば一生このままで居そうな気がするので、何とかして返事をしてもらおうと、3人は声をかけまくる。

「そろそろ麦野！任務は大成功だよ！まあ結局、ほとんどは私がやったんだけどね」

「超ちがいますよ。フレンダはただ仕掛けに火花をつけてただけじゃないですか。私が超活躍したんですよ」

「私もね、がんばったんだよむぎの。相手をおいかげたんだよ。ほめて」

「ちょっと抜け駆けはさせないって訳よ！麦野！私をほめてつて訳よー！」

「フレンダも何言つてるんですか！いつも肝心な時にミスするくせにこういうときにはかぎつて抜け駆けとか超あり得ませんよー騙されないでくださいよ麦野！私が超働いたんですよー！」

「嘘ついたら閻魔様に舌を抜かれるつて訳よー！」

「フレンダが超嘘ついてるじゃないですか！」

「むぎの。ほめて」

「・・・

取つ組み合いを始めるフレンダと絹旗を無視し、滝壺は褒めてもらおうと麦野の頭を軽くたたく。それでも動かない。その時、垣根が居ないことに気付く。同時に椅子が何個か減っていることも。

「むぎの。あの人はどうしたの？」

「・・・」

あの人という言葉に麦野が反応する。どうかしたのかと、3人は麦野を見る。

すると、麦野の体が震え始め、小さい声がぼそぼそと聞こえてきた。

「あいつが・・・クソメルヘンが・・・さつきまでしつこく窓・・・  
・クソ野郎・・・」

「麦野？ 頭超大丈夫ですか？」

「そうだ。死のう」

( ( ( 麦野が壊れた! ! ) ) )

驚いている間に麦野は窓から飛び降りようと足をかける。――は5

階だ。落ちたら本当に死んでしまう。慌てて3人は止めに入る。

「ちょっと…ダメだつて麦野…」  
「5階…ホントに死んじゃうって訳  
よ…やめて…考えなおして…！」

「離せフレンダ…もうオレは死ぬ…さつきクソ神がそうこつたん  
だ…！今すぐ自殺確定だクソ野郎おおおおおおおおおおおおおお…  
！」

さらりと暴れ、体の半分が窓から出る。必死に三人は麦野にしがみつ  
く。

「麦野おおおおおお…麦野が死んだら私たちは超どうすればいい  
んですか…？」麦野が居ないとアイテムじゃないですよ…」

「オレの代役なんてそこら辺のゴミどもを漁れば燃えないゴミが一  
つや二つでてくんんだろうがああああああああ…残りの燃えるゴミ  
は全員燃やしちまえよはつはつはつ…！」

「むぎの。死んじゃダメだよ。私達はむぎのがいない悲しい人生  
を送るんだよ？それでもいいの？」

「…」

滝壺の言葉で、麦野は動きを止める。暫くして、何も言わずに床に  
降り、きびきび歩くと椅子に座る。

「どうやら、仲間を不幸にしてはいけないと考えて死ぬのはやめたようだ。

「……あのメルヘンをどうにかしないと……オレが不幸になる」

「メルヘンって……あの超頭可哀そうな男の人ですか？その人に何されたんですか？」

「さつさまで抱き着いてきた」

「…………」

部屋の中が静かになる。麦野は顔を両手で覆い、シクシク泣きだす。

「男に一囃ぼれされてそいつに抱き着かれるってどうしたことだよ。  
・・オレは女じやねえ・・・アイツが絶対にこれないとこりつてない・・・？」

皆は必死に考える。その時、フレンダが思いついた。

「じゃあ、学校に行けばいいんじゃない？」

「学校……ですか？」

「そうそうー学校なら生徒と教師、関係者以外は入れない。結局、

役に立つのはいつも私って訳よー。」

えっへんと胸を張る。フレンダの案を聞き、麦野もそれがいいと思ふ。たくさんある学校の中で垣根と一緒に学校の確立なんてきわめて少ない。これで安全なところに長時間いれる。

そうと決まれば直ぐに準備をしよう。直ぐに無理やりにでも退院して、長いこと来ていなかった制服のシワを伸ばしたり埃を取つたりしないといけない。

麦野は荷物をまとめ、部屋を出た。

逃げるよひに退院し、無事、家についた麦野は、制服を整えていた。

「見のも久しぶりだな。この制服。最後に来たのは入学式の一週間後だっけ・・・」

「いや、不登校じゃないですか。そんなんでよく中退しないですね。  
・  
・  
」

「オレもそれが不思議だ。まあ、学園都市で七人しかいないレベル5が居たら学校の名が上がるんだろ。だから何としてもレベル5を置こうとしてるんだと思うな」

「そうだね。麦野はすごいもんね」

家から賑やかな声が聞こえる。その声を、あの男がこいつそり聞き、一人笑っていた。

次の日、早速麦野は学校に向かっていた。しかし、門の前で立ち止まってしまう。

(・・・オレのこと覚えてるやつなんかいねエよな・・・レベル5  
つて教えてねえし)

いや、学校に入ろうとしたときに不安がつのってき、足が止まってしまったのだ。

よく考えれば、自分が通っていたのは一週間だけ、しかも、その一週間。ほとんど自分は屋上にいたのだ。なぜなら、教室にいるとクラス全員が自分になぜか近寄ってくるからだ。めんどくさいから一

人でいれる屋上にいた。

だが、そんなことを考えていては駄目だ。自分は垣根から逃げるためここに来たのだ。

(そうだ。脅えんな。メルヘンと学校どっちがいい?断然学校だろうがあ!!!)

心を決め、門を過ぎる。すると、周囲にいた生徒がいきなり自分を見て止まった。

自分は何か変なのかと、麦野は服装を見る。しかし、どこも変なことはない。とりあえず、教室に行こうと、走った。

「せえ・・・せえ・・・なんなんだよたくつ・・・・」

全員が見てくる中、ひたすら走り、何とか教室についた。

なぜ自分を見てくるのか分からぬまま、自分の席はどこかと探す。

(てか、机が無いとかないよな?)

また新たな不安が出てくる。  
教室に逃げ込んだはいいが、クラスの全員がこっちを見てくるし、廊下にはすごい人ばかりができ、自分をみてくる。  
もうあきらめて帰ろうかと思つたそんな時、自分を呼ぶ声が聞こえ  
た。

「お、バーニー」

お礼を言いつと、後ろを振り向き、言葉を止める。

そこには一番会いたくない奴がいた。目の前にいるやつのために自分は学校に来たのだから。

「・・・帰る」

「待て待て！帰んな！それはいくらなんでもひどすぎだろ！－！」

「うるせえ！！オレはテーマが大嫌いなんだよ！吐き気がするく

「うーなあ……」

「ひびー。」

本当に帰らうとした自分の腰に、垣根が抱き着いてきた。  
それでも、引きずつて教室を出ようとする。

「馬鹿野郎！ テメエみてえなクソメルヘンは死ね！ 地獄に落ちて閻魔に舌抜かれてついでに田玉も抜かれてこい！」

「恐いなー！ オレのイケメン顔が台無しになるじゃねえか！」

「キモー！ 自分のことイケメンとか言つてるテメエキモー！ おええーー！」

何とかドアを掴み、そのまま出ようとすると。すると、垣根も右腕は麦野の腰を掴み、左手は動かないロッカーを掴んだため、動けなくなってしまった。

そのまま、お互には引っ張り合つ。もちろん、その間にでも麦野の暴言は止まらない。

「離せゴロフアーー！ 髮の毛全部引っ抜いてハゲにするぞクソ野郎！  
一三二が調子にのんじやねええええええええええーー！」

(「こつこえええええええええー！ 不良・・・！ ？ 不良なのかー！ ？」)

生前の性格が表れ始めた麦野を少し怖くなるが、それでも離さない。今日のために、昨日は必死に制服を探し、鞄を探し、教科書を探したのだ。絶対にあきらめない。

周りの生徒は面白がって誰も止めない。

「ちょっと見てよー！ 美形男子2人がなんかしてるよー！」  
「…」

「もしかして…禁断の愛…！？」まさかこれがボーイズラブというなのBしか！」

「マジかよ。でも美形だからありかもな。正直に言えば。オレ、ドアを掴んでる男に惚れちまた」

「大丈夫だ安心しろ。オレもだ」

面白がっている生徒たちに怒りがふつふつとわきあがる。だが、先にこの変態をどうにかしないといけない。

遂にドアから手を離し、腰に巻きついている右腕をどうにかしようと手をかける。すると、離すとは思っていないかったのだろう。垣根の驚く声が聞こえ、体が引っ張られた。当然、まだ腰に上では巻きついたままなので、麦野も一緒に引っ張られ、床に倒れる。

「　　」

全員が黙る。それもそのはず、垣根の上に麦野が覆いかぶさる形になってしまったからだ。

流石に垣根も黙り、恐る恐る上にのっかっている麦野を見る。そして、口をひくつかせ、力なく笑う。ゆっくりとこっちを向いた麦野の眉間にしわが深刻刻まれ、青筋も浮き、目もぎらついていた。

「はは・・・はははーーー。」

「はつ・・・ははは・・・・?」

その顔のまま、にやりと笑い、突然笑いだす。垣根も弱弱しく笑う。麦野は笑いながらゆっくり立ち上がり、近くにあつた机を掴み、片手で持ち上げる。何をしようとするのか分かった垣根は逃げようとするが、足に力が入らず、手の力でズルズルと後ろに下がる。しかし、壁にぶつかり、止まってしまう。

血の気が失せ、青い顔をした垣根が最後に見たのは、悪魔の顔をした麦野が机を勢いよく自分に向かって振り下ろす姿だった。

拝啓、今のお父様、お母様へ。  
今からオレ。死にます。

「までまでええええええええええええええ！－そこ窓－ここ4階－！落ちたら死ぬ！死ぬからあ－－！」

「ふふふ・・・なんか吐き気がするくらい気持ち悪い声が聞こえる・・・あははは・・・」

「醜い！ いかがやねー。本物にやねー。ナリヤドリホルのレジが嫌  
いかー？」

「大嫌い」

「そこだけハツキリと答えるな」

この後、オレはクラス全員の決死の働きにより、死にそこないまし

た。残念！！

一時間目の国語の時間。

「死にたくないな」死にたくないな」メルヘンが先に死んだら生きたいな」

「せんせーい。麦野君がおかしいでーす」

「今はそっとしておいてあげようね」

二時間目の歴史の時間。

「もう駄目だ・・・オレはカス人間だ。この世にいるからいけないんだ。だからクソメルヘンなんかにあつちましたんだ・・・嗚呼、

「なんでおれは生まれてきたんだろう。なんでメルヘンがこの世に存在してるんだろう・・・鬱だ。死のう。そうだ死のう。死んでしまえばもう何もかも終わつてすつきりに・・・」

「せんせい。麦野くんが病み期突入しています」

「それはいけないね。誰か保健室に連れて行つてあげて」

そして、

「なんでお前に運ばれるの？なんでおんぶなの？」

「だつて席が近かつたから」

なぜかメルヘンにおんぶされた。嫌だ。殺す。こいつ殺す。真つ二つにしてやる。

「オレを真っ一いつに殺そつとするなよ」

「なあー。お前って読心術できるのか?」

心を読まれた。

・・・まあ、しょうがねえ。保健室につければこつは帰るだろ。

それまでの辛抱だ。

お

保健室

「お～。ベジアの上で手足をばたつかせて・・・小ちこ子供みたいだなあ～」

「メルヘンがにやにやした顔でこっちを見てきやがる。キモい・・・  
なんでここに帰らねえんだよお・・・

とりあえず理由を聞いてみる。

「んっ？授業つまんねえし、お前と2人つきりになりたかったから」

「はあ？ 意味わかんねえ」

そういうつて、メルヘンを見ない様に反対側を向く。

本当に、めんどくさいやつにすかれたもんだな・・・  
・・・てか、オレ馬鹿だな。この長点上機は能力開発で学園都市ナンバーワンを誇る高校。学園都市の五本指の一つに数えられる超エリート校だぞ？

それに突出した一芸ができれば高位能力者でもなくともいけるところ・・・つまり、ここにいるやつらは全員、何かしらで普通から飛びぬけてるエリートってことだ。

そんなこの高校に、レベル5がオレ一人とかありえなかつたなあ・・・  
・馬鹿だオレ。

「？おいおい、せつかく一緒に高校で偶然に同じクラスで、奇跡的に席が隣なんだから、もっと声とか聞かせてくれてもいいだろ？こっち向けよ」

「キモい、死ね。ゴミ人間」

（コイツ・・・！人の心抉る言葉ばっかりいいやがつて・・・！  
！少しお仕置きが必要だなあ・・・）

「虫以下」

ブチッ

ん？なんかブチッて聞こえた・・・よなあ？布破いた？

そう思つて体にかぶつてる布団を見ようと、起き上がる。すると、

いきなり立ち上がった垣根に両手首を捕まれ、押し倒された。

「 . . . ?」

「 . . . あんま超のつてつから . . . お仕置き」

「 ??はあ? . . . ! ! ?」

意味が分からず睨みつける。

すると、片手で両手首をもし、オレの太ももを触ってきた。  
えつ！？えつ！？こいつ何してんの！？頭大丈夫か！！？と  
りあえ  
ず . . .

バキイツ!!

「・・・・・痛い・・・」

「だらうつな。思いつつきり殴ったからな」

とりあえず、掴まれている両手首のつり、利き手の右手を血虫にして、顔面を思いつきり殴った。

メルヘンの鼻から鼻血がボタボタ落ちてくる。やべっ、床ふかねえと。

「でかよお・・・・ひじへんへんひん

「あ？ 向をだよ？ 勝負かよ？ ー」

「・・・・・」

「あん？なんだよその顔

(「ハヤシって……むつかや純粋……？」)

「？」

本当におかしなやつだなあ。本当に病院連れて行こうかなあ？  
そつ思いながら、オレは雑巾で床の血をふく。

やあ、皆。元気かな？

オレ、今すこしいことに気付いた。とっても重大なことに。

— ロイツ（麦野）、「とっても純粹だった。

えつ？ ロイツ、高校生だよなあ？ 普通、中学生くらいになれば「やらせりよ」は、知ってることじやね？

てか、顔面が痛い。特に鼻が。大量に鼻血出たし。ロイツじやなかつたらおもいつきしムカついて殺つてるところだぜ。

・・・ ロイツ、こんな細い体のどこからあんな力でたんだ？ 肩幅も狭くて体のラインがハツキリしない服来てるとき、後ろからみたら女にしかみえねえぞ・・・

「なあ。お前って本当に男？」

一応聞いてみる。

そしたら、おもいつきり「頭大丈夫か？」みたいな顔で見られた。やべえ、泣きそう。

「お前・・・病院行くか？」

「ダメだ、涙が」

「？」

チクショウ！首をかしげるの可愛いなあ！もう！  
オレの鼻からまた大量の血が出てきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5846x/>

男のオレが、転生でとある魔術の男の麦野に転生！！

2011年12月20日18時52分発行